

令和5年度

研究紀要

第25号

河北町教育研究所

令和5年度 河北町教育研究所 研究紀要

1	研究紀要の発刊に寄せて	3
2	あいさつ	4
3	令和5年度河北町教育研究所〈概要〉について	5
4	河北町教育研究所 令和5年度組織運営機構図	7
5	研究部会	8
	（1）授業改善部会	9
	（2）児童生徒理解部会	11
	（3）特別支援教育部会	13
	（4）教育行財政部会	15
6	専門部会	17
	（1）学力向上対策部会	18
	（2）生徒指導部会	27
	（3）特別支援学級部会	29
	（4）保健部会	31
7	小中実践交流会	33
8	学校研究	38
	（1）西里小学校	39
	（2）溝延小学校	41
	（3）谷地中部小学校	43
	（4）谷地南部小学校	45
	（5）谷地西部小学校	47
	（6）北谷地学校	49
9	あとがき	51

研究紀要の発刊に寄せて

河北町教育委員会教育長 板 坂 憲 助

令和5年度を振り返りますと、これまでにない酷暑の夏、新型コロナウイルスの感染症の感染症法の2類から5類への移行、そして、新型コロナ感染症とインフルエンザの同時流行と教育活動において支障を来した1年となりました。特に、熱中症を防ぐために、運動会の時期をずらしたり、部活動の活動場所をクーラーの効いた部屋で行ったりするなど、様々な工夫をしたことが思い出されます。

このような状況の中、コロナ禍の前の状況に戻りつつあることも大変喜ばしいこととされているところです。各校内で、あるいは各学校間で、授業研究会に積極的に参加し合い、事後研究会にも積極的に参加し合う光景が戻りつつあります。生の授業をリアルに参観し、事後研究会において膝を向き合いながら、自分の言葉で建設的な話し合いをもち、授業について、教育についてとことん熟議するよさを忘れかけていたことを、このコロナ禍の空白が教えてくれたような気がします。最近の特徴として、参加型学習(ワークショップ)が大半を占めています。その話し合いの中で重要だと思うことは、自分事として考え、相手の身になって傾聴し、内なる本質を引き出すことであり、質の高い事後研究会につながると考えています。更に、もう一つ大切だと感じていることは、子どもに学ぶと言うことです。子どもの発する言動の根拠となるものを見抜く洞察力を教師としてもっていることです。かなり難しいことですが、教師と子どもとの人間関係づくりで最も効力を上げる力と思っています。子どもにとって、自分のことをわかっていてくれる先生の存在は、何よりも自信を与えます。

50歳代後半の大量退職に伴い、若手の教員が増えつつある状況があります。校内で、あるいは学校間で授業を見せ合い、上記で述べたような授業について、そして子どもについて話し合うことが、教師の指導力を高め、ひいては児童生徒にとってわかる、できる魅力的な授業づくりにつながるのではないのでしょうか。是非、授業研究の日常化に向けて、各学校の実践に期待しているところです。

最後に、本研究所の活動のために、ご指導をいただきました先生方や全所員の皆様のご協力に感謝を申し上げ、発刊に当たってのあいさつといたします。

あ い さ つ

河北町教育研究所 所 長 鈴木 正直

「思いっきり、みんなで一緒になって活動できる喜び」を再認識できた年になりました。安全と安心、学びの保障を意識した教育活動の中で、少しずつ子どもたちと先生たちの笑顔と笑い声が広がり、活気が学び舎に帰ってきたのです。5月8日に新型コロナウイルス感染症の位置づけが「2類」から「5類」に移行したことを受け、活動制限が緩和され、やっと学校生活に日常が戻ってきました。全員参加型の全校集会、各行事のほとんどが4年ぶりの実施となりました。「学校」の存在意義を見つめ直すこともできました。

世界が先行き不透明な予測困難な時代を実感する中、日本の学校教育はこの間に「新学習指導要領」の完全実施と「令和の日本型学校教育（個別最適な学びと協働的な学び）」の推進が図られてきました。そのねらいは、①自分の良さや可能性を認識しあらゆる他者を価値ある存在として尊重すること、②多様な人々と協働しながら豊かな人生を切り拓くこと、③持続可能な社会の創り手となることにあります。主体的・対話的で深い学びへの授業改善も進められてきました。ICTの活用では、GIGAスクール構想の下、児童生徒一人一台のタブレットが整備され、個別に最適化された教育の実現へ活用が進んでいます。

このような中、河北町教育研究所の事業として久々に全所員による研修会が行われました。小中実践交流会においては河北中学校の授業が公開され、「生き生きと学び、自立に向かう生徒」の姿を、理科、英語、道徳の授業から学びました。事後研では、視点①対話的な学びにつなげる言語活動の工夫について、視点②学びを整理し次につなげる振り返りの工夫について、小中それぞれの観点から活発に意見が交流され、授業づくりへのヒントを得ることができ、有意義な研修となりました。小学校の卒業生と微笑み合って会話する姿、学校の枠を越えて、子どもの姿と授業を熱く語り合う姿を誇らしく思います。各研究部においては、授業改善部会は「授業におけるICTの活用」、児童生徒理解部会は「チームで行う子ども理解」、特別支援教育部会は「放課後等デイサービスの活用」、教育行財政部会は「適切な行財政運営」について研修を深めることができました。どの研修も、目の前の課題に即した内容であり、学校運営に大いに活かすことができたのではないのでしょうか。

今後とも、河北町教育研究所が「ふるさとに学び、互いに高め合いながら、いきいきと未来をひらく人づくり」を目指し、教育のプロフェッショナルとしての力を高め合える「チーム河北の学び舎」でありたいと思います。そして、小小・小中連携を充実させ、地域の特色と児童生徒と職員の個性を生かしながら、各校の学校教育目標の実現に向けて前進していきますことを期待いたします。

最後になりましたが、ご指導をいただきました講師の先生方、そして日々の教育に情熱を注いでくださっている全所員の皆様、ご支援・ご協力をいただきました河北町教育員会をはじめ関係各位に、心より感謝申し上げます。

令和5年度河北町教育研究所<概要>について

2023.4.1 河北町教育委員会

<第8次河北町総合計画>

「輝く人・町 夢と未来へ挑戦するまち」

<第6次山形県教育振興計画>

「人間力に満ちあふれ、山形の未来をつくる人づくり」

<第2次河北町教育振興計画 基本目標>

**ふるさとに学び、互いに高め合いながら、
いきいきと未来をひらく人づくり**

河北の人、自然、歴史、文化のよさに浸り、ふるさとを愛する心を養うとともに、町民が生き生きと学び合い、高め合いながら、次代を担う人材を育成します。

基本目標の達成を目指して、研鑽を深めます。



<目的>

教育に関する専門的、技術的事項の研究及び研修等を行い、教育の向上に資すること
河北町教育研究所設置条例より

令和5年度のテーマは「小小・小中連携」

<組織と活動計画>

	部会名	主な内容	期日
研究部	授業改善部会	授業づくり・ICT活用	7月27日 (夏の半日研)
	児童生徒理解部会	学級経営 いじめ・不登校の未然防止	
	特別支援教育部会	発達障がいの理解、切れ目ない支援	
	教育行財政部会	適切な行財政運営	
専門部	学力向上対策部会	各種検査・調査の集約と分析等	6月21日・11月16日
	生徒指導部会	生徒指導の事案に係る研修等	7月13日・12月7日
	特別支援学級部会	学級担任としての資質向上研修等	5月23日
	保健部会	感染症対策、学校保健に係る研修等	10月3日・1月19日

※このほか、事務局会、運営委員会が年2回ずつ行われます。

<学校間交流>

・**小中実践交流会** 河北町立河北中学校 11月10日(金) 全所員参加

・**各学校校内授業研** 年1回は、他校の授業研に参加し、子どもの姿で語り合おう。

※学校の実態に合わせて、低・中・高学年部会や教科部会から代表者が参加し、校内で共有するなど工夫をお願いします。

裏面に各校の研究テーマと校内授業研究会の日程、内容の記載があります。 **Check!!**

各学校の校内授業研究会の日程

同じワードが各校にあります。それぞれどんな想いが込められているのか気になります。「百聞は一見に如かず」です。



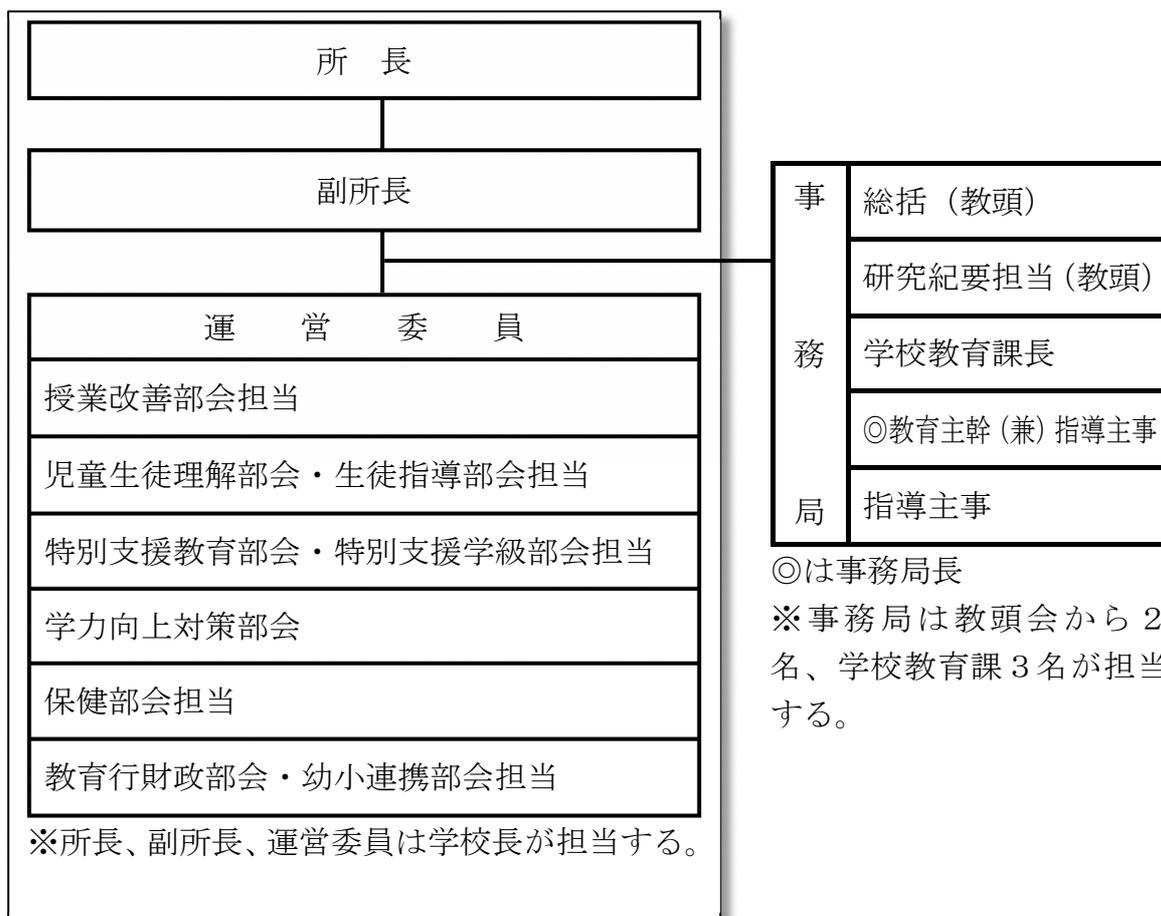
ぜひ共有を…各校の研究テーマ

	自ら学びをつくる子どもの育成（2年次） ～子どもが主体的に学ぶ授業づくり，学級づくりを通して～			
	6月15日（木）	算数（2年）、算数（5年）	午前授業 事後研 15:10～	
	7月10日（月）	社会（3年）、国語（4年）		
	11月17日（金）	算数（1年）、社会（6年）		
	自ら学び続ける子どもの育成（4年次）			
	5月23日（火）	道徳（6年）	9月6日（水）	算数（3年）
	6月21日（水）	道徳（2年）	10月19日（木）	国語（1年）
	7月12日（水）	社会（4年）	11月29日（水）	国語（5年）
	午前授業（5月23日は午後授業） 事後研 15:00～（10月19日のみ15:45～）			
	仲間と関わりながら、学び方を見つける子どもを育てる ～「協働的な学び」と「個別最適な学び」を目指して～			
	6月28日（水）	生活科（2年）、国語科（4年）	午前授業 事後研 15:00～	
	8月30日（水）	総合（6年）		
	11月15日（水）	生活（1年）、自立活動（知的）		
	11月28日（火）	総合（3年・5年）		
	「主体的・対話的で深い学びの実現を目指して」（3年次）			
	6月22日（木）	算数（5年）、生活単元（知的）	午前授業 事後研 14:40～	
	7月12日（水）	算数（2年）、国語（3年）		
	10月27日（金）	体育（4年）、国語（6年）		
	11月20日（月）	国語（1年）、自立活動（病弱）		
	誰一人取り残さない 子供が育つ授業づくり			
	6月28日（水）	算数（3・4年）	授業開始 9:30～ 事後研 15:00～	
	10月18日（水）	国語（5・6年）		
	11月22日（水）	算数（1・2年）		
	「生き生きと学び続ける北谷地っ子」の育成 ～みんなが考え、みんなで深める～			
	7月10日（月）	生活（2年）、算数（3年）	午前授業 事後研 15:10～	
	9月6日（水）	算数（知的）		
	11月22日（水）	算数（4年）、算数（6年）		
	12月13日（水）	算数（1年）、国語（5年）		
	生き生きと学び、自立に向かう生徒の育成＜2年次＞			
	5月29日（月）	国語（2年）助言者 三浦登志一 先生	授業開始 13:50～	
	9月11日（月）	数学（3年）、保体（2年）、社会（3年）	事後研 15:00～	
	11月10日（金）	道徳（1年）、英語（2年）、理科（3年）	小中実践交流会：詳細は後日	

・授業研の詳細については、各校から案内があります。

・各学校の校章です。由来や学校の概要について、R5かほくの教育【概要版】をご覧ください。

河北町教育研究所 令和5年度組織運営機構図



研 究 部	授業改善部会	38名所属
	児童生徒理解部会	32名所属
	特別支援教育部会	34名所属
	教育行財政部会	8名所属

専 門 部	学力向上対策部会	9名
	生徒指導部会	8名
	特別支援学級部会	13名所属
	保健部会	7名所属
	幼小連携部会	令和6年度から

- ※ 研究部、専門部の部会長は、教頭が担当し教頭が所属する学校に事務局を置く。ただし、教育行財政部会、特別支援学級部会、保健部会は所属部委員から部会長を選出する。
- ※ 所員は、研究部のいずれかに所属し、専門部員は、各学校の代表者で構成する。

研究部会

授 業 改 善 部 会

I テーマ タブレットの効果的活用と小中連携に向けて

II 活動の内容

1 第1回研究部会

- (1) 日 時 令和5年7月27日(木) 9:00~11:50
- (2) 場 所 河北町立谷地南部小学校 食堂
- (3) 内 容

① Canva (キャンバ: 画像デザインソフト) の基本操作について

【講師: 株式会社WILL 三浦 麻耶 氏】

Canvaとは、オンラインで使える無料のグラフィックデザインツールで、豊富なテンプレートと素材(写真、動画、イラスト、音楽)を活用し、簡単な操作で文書やポスター、ホームページ等簡単にあらゆるデザインを作成できるフリーソフトである。

【参加者の感想より】

- ・Canvaは、授業や掲示物の作成などに応用できそうかと思いました。グループ操作、活動で表やグラフを作ってみたかったので使えそうです。
- ・Canvaでは新聞やチラシ作りなど、学活や総合などで使うことができそうなテンプレートがありましたが、アカウント、情報量、適切な写真かどうかなどのことから子どもが使うことは難しいと思いました。
- ・Canvaは子どもたちが自由に使えると、様々なアイデアが出てきて面白く感じました。

② Chat GPT (AI を使ったチャットサービス) について

【講師: 株式会社WILL 本間 俊光 氏】

※現段階では、教育委員会支給の端末ではChat GPTを使用できないため、株式会社WILLさんより端末(ipad)を9台用意していただき体験する形をとった。

ChatGPTとは、ユーザーが入力した質問に対して、まるで人間のように自然な対話形式でAIが答えるチャットサービス。与えられたテキストの指示に対して自然言語を生成するAIで、インターネット上にある膨大な情報を学習し、複雑な語彙・表現も理解できるのが特徴である。

【参加者の感想より】

- ・ChatGPT の使い方について、便利な一方で使用する用途を考えていく必要があるとも感じました。具体的にどんな場面で使用することが効果的であるのかなど、今後実践例が増えてくるとありがたいと思います。
- ・ChatGPT は、まだ授業（準備を含む）や校務の中でどのように活用できるのかがイメージが持っていないので、まずは試してみることが必要だと思います。
- ・生成AI が私たちの生活や仕事に入ってくれば、かなり違った形の働き方になると思いました。使いこなせたらよいのですが、そのためには各校での研修やルール等の確認が必要で、片手間にはできないことだと感じました。

③ Kahoot!（カフート：教育用クイズアプリ）

【講師：谷地西部小学校 大前 圭史 教諭】

Kahoot! は、教員等が作成した問題を、子どもたちがゲーム感覚で楽しみながら回答することで、基礎的内容の定着を図ることのできるアプリである。

【参加者の感想より】

- ・クイズやゲーム形式の Kahoot は大人でも楽しいと感じたので、子どもたちの学習の定着を図る際に使ってみたいと思います。
- ・kahoot については、今までプリントでやっていた問題を使えるかなと思いました。4択に作り変えてやってみようかと思います。楽しそうです。

④ 対話タイム（実践交流・研修を通しての学びの共有・小中連携等）

- ・中学校の先生方から、小学校でこんな力が身につけているといいなという声が聞けたのもとても参考になった。
- ・グループでそれぞれの実践を知ることができたこと、中学校の先生からの中学生の現状なども知ることができ大変よい時間になりました。



Ⅲ 成果と課題

- 授業改善や校務の効率化に役立つ新たなアプリやサービスがたくさんあり、そうしたアプリの活用や情報を得ることの大切さに気づくことができた。学校間の情報交換では、より効果的なタブレットやアプリの活用、小中連携に向け育成したいスキル等について活発に話し合いがなされた。
- 今後の生成AIの教育現場での活用、個人アカウントの教育用タブレットでの使用等、効果的なタブレット活用に向けたセキュリティーポリシーの確認が課題である。
(谷地西部小学校 増川 秀一)

児童生徒理解部会

I テーマ「チームで行う子ども理解

～ケース会議を通して～

「もしも自分が教育相談コーディネーターになったら、何から始める？」という想定のもと、教育相談のスタートアップについて理解し、模擬ケース会議を通して体験的に学ぶことをねらいとして、下記のとおり本研修を実施した。

II 活動の内容

令和5年7月27日(木) 8:50~11:50 溝延小

講話・演習 講師：スクールカウンセラー 區藤 良 氏・西塚 かずみ 氏

1 **講話** 「教育相談 基本の『基』」 區藤 良 氏

(1) コロナ禍の子どものこころ

- ・生活の変化
- ・対人関係の変化(親子・友人)
- ・居場所と繋がりの変化
- ・体力の低下(こころの体力の低下)

(2) 基本の「基」

- ① 「ラポール、できていますか」 → 信頼関係がなければ、何もできない
- ② 「児童生徒の一日を想像できますか」 → 想像と実際の違いは必ず生じる
- ③ 「表現力を向上しましょう」 → 自分の表情、声のトーン、姿勢、纏っている空気を意識する

④ 「これ、やめましょう」

- ・気のせい(気にするな) ・約束 ・迷惑
- ・逃げ ・甘え ・ズルい ・なんで?

→ **相手に心を開いてもらうには技術が必要**

2 **演習** ダミー事例をもとに、模擬ケース会議を行う

(1) チームで行う教育相談の一例として、「ホワイトボード・ミーティング®アセスメントスケール」を用いてのケース会議を紹介した。ダミー事例に、右のアセスメントスケールを当てて丁寧に評価・分析・翻訳し、「明日から始める小さな一歩」



【ホワイトボード・ミーティング®アセスメントスケール】

- ① 生命・身体の危険を回避する
- ② 本人のプレッシャーを緩和する
- ③ キーパーソンのプレッシャーを緩和する
- ④ 過刺激をとる
- ⑤ 強みを強化して役立てる
- ⑥ 言葉や態度の意味を翻訳し、問題行動のストーリーを見立てる
- ⑦ 最高と最低の状態を予測し、今の状態からスモールステップを積み上げる
- ⑧ NG(失敗体験)→OK(成功体験)にする方法を体験的に学び直す
- ⑨ 何気ない日常に、ドキドキワクワクのチャレンジがある
- ⑩ チームで役割分担して支援する

を考えるプロセスを見てもらうことにより、これまでケース会議を行ったことのない先生方にも、ケース会議の流れやイメージをつかんでいただいた。

- (2) 小中学校の先生方の混合チームをつくり、「不登校傾向の6年生男児」を想定したダメー事例を用いて、実際にケース会議を行った。チーム内で学級担任、教育相談コーディネーター、生徒指導主任、養護教諭、管理職などを役割分担し、当事者が安心して登校できるようにするために、誰が、いつまで、何をするかを明確にすることをゴールに設定して、さまざまな立場から情報を集め、アセスメントしていく過程を体験していただいた。情報を可視化して状況を俯瞰したり、想像力を働かせ、当事者の困り感をチームで共有したりすることによって、具体的な支援策を考えることができた。



3 振り返り（参加者の声）

- 教育相談「基本の『基』」は、子どもと関わる私たちが決して忘れてはいけないことがたくさんあり、大きくなずきながらお聴きしました。ラポールや想像力はとても大切で、「聴いてほしい」と思ってもらえる人でありたいと、さらに強く思いました。
- ケース会議では、さまざまな視点から情報が出され、チームで対応する良さを実感しました。より具体的に、作戦と役割を明確にした次の一手が効果的ということ学びました。
- ケース会議の演習を通して、児童生徒のアセスメントと対応の進め方についてイメージをもつことができました。特に、「アセスメントスケール」を初めて知り、今後、校内でも実践できればと思いました。



Ⅲ 成果と課題

三年間のコロナ禍により、児童生徒の「こころ」にも影響が及んだ。不登校やいじめが急増している昨今、学校において、チームで行う教育相談は不可欠である。本研修では、「教育相談 基本の『基』」と題して教育相談のスタートアップや、面談の際に大切にしたいことを学び合った。ぜひ日常の学校生活に活かしていただきたい。また、教育相談コーディネーターの先生はもちろん、そうでない先生にも、児童生徒への丁寧なアセスメントと、スモールステップを積み重ねていくことを大事にしながら、本研修での学びを各学校でご活用いただきたい。

（溝延小学校 古澤 純子）

特別支援教育部会

I テーマ

障害福祉制度との連携の可能性

II 活動の内容

- (1) 日時 令和5年7月27日(木) 9:00～11:30
(2) 場所 河北町立谷地中部小学校 食堂
(3) 内容 講話「子どもの困り感に寄り添うために」
～知っておきたい障害福祉制度～

講師 社会福祉法人さくらんぼ共生会

西村山地域機関相談支援センター「かぼちゃ」 豊島 陽子 氏 遠藤 律子 氏
サポートハウス「かぼちゃ」 峯田 大義 氏



① 放課後デイサービスの概要について

「障がい」って？

- みんなが同じ幸福を味わえるように、個人の特性に合わせた「できるようになる環境」が必要。…… ICF モデル
- その環境を整えるための一つのツールとしてあるのが「福祉サービス」。
- 福祉サービスの一つとしての「療育のサービス」。その一つが「放課後等デイサービス」

どんな流れで利用できるの？

- 親が、子供が、教育機関が、困ったときの窓口になったり、福祉サービスを利用する際のサポート機関になったりするものが「相談支援事業所」。
- どこに相談したらよいかわからない時の最初の窓口になったり、相談支援事業所の後方支援や地域ネットワークづくり等を行ったりしているのが「基幹相談支援センター」。
- 相談支援の際には自己負担なし。
- 困り感を相談しながら、保健師等の専門職より「療育のサービスが適している」と見立てがあれば、療育手帳等が無くても療育サービスが支給決定される。

② 利用の実際について

多職種連携の効果

- 親の困り感、学校の困り感、子供に関わる立場での困り感を、それぞれが抱え込み孤立してしまうことを防ぐ。
- 保護者、学校、医療、行政、福祉の担当が、その子供について多面的にとらえ、多角的なサポートを考えていくことができる。
- 「一人で抱える困り感」ではなく「チームの抱える課題」になり、みなで改善に向けて知恵を出し合って取り組むことができる。

実際のケース紹介

- 就学前に相談。子どもと共に母親への支援も必要。
 - 療育サービスの検討をするも、見学時点で辞退。しかし、就学を機に事業所を週1回利用。
 - 小学校に入って、療育のサービスは安定して受けることはできているのだが、学校でのストレスが大きく、渋り、癩癩等新たな課題が出てくる。
 - 多種連携の中で医療機関の「無理をさせない」というアドバイスを受ける。
 - 子どもの安定と引き換えに「学習面」に取り組まない課題も見える。
- ③ 情報交換・全体での共有
- A～Fのグループに、町内の小中学校の部員が分かれ、情報を交換。
 - 日ごろの指導の中での悩みや、指導上困っていることなどをお互いに話し、共有することができた。
 - 随時講師の先生が話し合いに入り、アドバイスをもらうことができた。
- ④ 感想より
- 今後保護者から「放課後サービス」の相談を受けた際に、大まかな流れやメリット等について説明ができそうだ。
 - 困ったときの窓口はどこなのか、相談事業所・放デイ事業所等の一覧があり、ありがたい。情報共有の時間、有意義でした。
 - 多職種連携。毎日子供たちと顔を合わせると「私が何とかしなきゃ」と思ってしまうますが、様々な専門の方と協力し合って子供たちを支えたい。
 - 「かぼちゃ」さんの名前は聞くけどなんとなくしか分かっていなかった。障害福祉サービスについて、深く知ることができ、今後に生かせよう。



Ⅲ 成果と課題

- 今回の研修の内容は、福祉サービス側の「知ってほしい」と、学校側の「知りたい」がぴったりとマッチした内容になり、お互いに充実することができた。
- 学校で子供・親と関わる立場として、一人で悩まず「チームで対応」という方向付けを強くしていただいた。
- 利用するには、まずは「知る」こと。その第一歩を進めることができた。
- 放デイと学校の連携の大切さは理解できた。子供の力を伸ばすために、こういった形で連携を進めていけばいいのか、検討しなければならない。
- 通常学級において、友達とうまく関われない子、すぐに暴力をしてしまう子、思いを言葉で伝えることに課題がある子。近年そういった子が増えている。福祉的アプローチの検討も有効だろうが、キャパもある。どのように進めることが一番いいのかを、今後も関係機関と連携しながら進めなければならない。

(谷地中部小学校 近松 浩)

教育行財政部会

I テーマ

「信頼に応える学校事務をめざして」

II 活動の内容

1 第1回研究部会

(1) 日時 7月27日(木) 9:00~11:30

(2) 場所 河北町役場 302会議室

(3) 内容

① 講話:「河北町での生涯学習について」

講師:生涯学習課長 日下部 敦子 氏

河北町で生涯学習の主要事業について説明いただいた。

〈生涯学習係〉

基本方針1 家庭・地域・学校の協働による社会全体の教育力向上

○家庭・地域と連携する学校教育推進のため、地域学校協働本部からコミュニティスクールへの助言・指導や、放課後子ども教室(夏休みを除く6月~10月の水曜日)を行っている。

基本方針2 地域に根ざした生涯学習社会を築く

○地域に伝わる行事や伝統芸能を継承する団体への支援事業として、文化財に関する用具等を新調するための補助や民俗芸能等のHP作成等を行っている。

○生きがいづくりや芸術文化の振興を図るため、芸術文化団体やサークル活動を支援する取り組みとして、文化活動による全国大会出場者への激励金支給を行っている。(1人あたり1万円)

〈社会体育係〉

基本方針 活力ある生涯スポーツを推進する

○生徒が活動を自由に選択できる環境づくりや、将来にわたり地域でスポーツや文化活動に継続して親しむことができる機会の確保、教員の働き方改革推進を目指し、来年度からの本格化する休日部活動の地域移行について検討を進めている。

○選手の育成強化のため、スポーツ少年団や中学校の部活動を支援する

事業として、団員募集チラシの発行、活動補助金の交付、合同結団式、実技研修会、中学校スポーツ選手育成強化事業補助。

以上、今回、説明いただいたことを学校でも情報共有し、制度を活用できるように努めていきたい。

② 大型備品（管理備品、教育活動備品）の現有数の確認

教育行財政部会では「大型備品現有数一覧表」を作成し、毎年新たに購入した備品等の現有数確認を行っている。町内各学校の大型備品は学校間で貸し借りができる体制となっており、学校教育活動に非常に役立っている。さらに必要とされる大型備品の要望については校長会と連携しながら町に継続要望して各学校の教育環境整備に努めていきたい。

③ 事例研修、情報交換

学校集金関係について、銀行での払戻の際に金種別手数料がかかることや、銀行の統廃合が進むなかで、ネットバンクの使用について理解を深めて、校内会計の負担を軽減していきたい。

Ⅲ 成果と課題

- 学校で児童生徒が安全に生活し、教育活動が円滑に行われるためには、財務管理を通して、学校経営に参画する事務職員の役割も大きくなっていく。そのためにも、快適に学習できる環境を整備し、教育財産を適正かつ有効に活用できる、信頼に応える学校事務を目指して研究を進めた。その結果、部員一人ひとりの資質と力量を高めることができた。
- 生涯学習係、体育学習係の主要事業について説明いただいた。コミュニティスクールや部活動の地域移行など、重点となる事項について共通理解が図られ、大変有意義な研修になった。
- 若い職員が多いため、事例研修や情報交換は、貴重な自己研鑽の場であり、同時に有効な事務連携の場となっている。事例の共有や課題解決に向けての話し合いを積極的に行っていったことで、見逃しがちな小さな疑問も解消していくことにつながった。今年度も各校で連携を取ることが多くなり、直接不安なことや疑問点を相談できるようになった。
- ▲ 財務会計システムを各校で使用できるようになり、これまでよりも効率よく業務を行うことができるようになった。しかし、財務会計システムの操作方法や予算執行についての疑問点などを、これまでのように学校教育課の職員に直接相談することができなくなった。町予算に関する研修を設けていきたい。

（谷地南部小 高橋花奈）

専門部会

学力向上対策部会

I 運営方針

河北町内の小・中学校の全児童生徒の学力をより一層向上させるため、課題意識を共有し、情報交換を行いながら授業改善に取り組む。

II 活動の内容

① 第1回学力向上対策部会議

6月21日（水） 西里小学校

- ・ 部会組織、運営方針、事業計画
- ・ 各校における「アクションプラン」の作成

② 第2回学力向上対策部会議

11月16日（木） 西里小学校

- ・ 本町における全国学力・学習状況調査の結果（秋葉千絵指導主事より）
- ・ 各校における「アクションプラン」の取組み
- ・ 学力向上に関する情報交換

III アクションプランの取組み

各校において、学力向上に向けた「アクションプラン」を作成している。

学校全体の課題を明確にし、育成したい資質・能力について全職員で共通理解を図り、1時間1時間積み重ねを意識した取組みにしている。また学年毎の振り返りから全体につながる事を絞って取り組んでいる。このアクションプランを日常的に意識して活用していくためにもカリキュラムマネジメント、学級経営案等をどのように結びつけていくか、一体化した作成が必要になってくる。

また小中学校ともに、基礎的な知識・技能の定着が弱い。基礎的な知識・技能を確実に定着させるためには、それらを活用した思考・判断・表現する場면을意図的に学習活動に位置付けることが大切であり、この時間を十分に確保できているかを改めて見直す必要がある。そして、目的に応じて必要な知識・技能を活用することを繰り返していく中で、児童生徒がその事象に対する意味を再認識したり、納得したりする場面を設定し、授業のまとめと振り返りを充実していくことが大切である。

III 全国学力・学習状況調査の結果から （町教育委員会からのご指導）

本町の小学校の結果については国語・算数の平均正答率は全国・県の平均正答率から下回っている。「国語の勉強が好き」と回答した児童の割合は、県や全国と比べて低い。

文章の種類とその特徴についての理解に大きな課題がある。また、複数の情報を整理して自分の考えをまとめたり書き表し方を工夫したりすることの課題も大きい。情報と情報の関係を様々な方法で整理することで、考えをより明確なものにしたり、思考をまとめたりできることを実感できるように指導する必要がある。

「算数の勉強が好き」「算数の授業内容はよくわかる」と回答した児童の割合が県や全国の平均と比べて高く、意欲的に算数の学習に取り組む児童が多いことがわかる。学習内容の見直しに関する質問でも同様に、県や全国の平均と比べて高い結果だが正答率との相関はない。日常生活の問題を解決するために、場面を式に表したり、式を場面と関連付けて読み取ったりできるようにすることが大切である。また問題場面の数量に着目したり、計算に対して成り立つ性質に気付いたり、計算の仕方について捉え直したりできるようにする必要がある。そのために場面を解釈して数量の関係を捉え、問題の解決方法を式や言葉を用いて説明できるようにすることが大切である。

本町の中学校の結果については国語・数学の全体の平均正答率は、平均並の範囲に入っている。国語では、意見と根拠、具体と抽象など情報と情報の関係についての理解には課題がある。話したり書いたり読んだりするために共通して必要となる基本的事項を繰り返し、系統的に身に付けられるようにする必要がある。

数学では「A数と式」「B図形」については、小学校でも「A数と計算」「B図形」の領域に弱さがみられることから、小学校と共通した課題があると言える。また、「C関数」（表やグラフからの情報の読み取り、グラフを事象に即して解釈する事）についても、小学校における「C変化と関係」（伴って変わる2つの数量の関係）と同じように課題が見られ、算数・数学科で育成を目指す資質・能力を系統的に培っていく必要がある。

英語の読むことについては、文と文との関係を読み取りながら、各段落の主な内容を捉え、文全体の概要を捉えられるようにする必要がある。そのために、日常的な話題に関する文章について、時系列に情報を整理したり、内容を簡単な英文や絵で表現したりするなどの言語活動を工夫することが考えられる。

VI 成果と課題

○小中での学習での課題が話し合われた。今後、学習の形態、宿題や自主学習の取り組み等、小中での連携が必要となることを再認識した。。今後は幼小中、小小の連携した学習への取り組みをより一層進めていきたい。

▲授業改善によって、学力向上を図っているが、特に、基本的な知識・技能を活用した思考・判断・表現する場面を意図的に学習場面に位置付けることが大切である。また、授業の「まとめ」「振り返り」の位置づけを明確にし、学びを調整する力を育成していきたい。学習の基礎・基本の定着が重要であり、学習の基盤である国語教育を意識することが必要になっている。音読に力を入れている学校もあり、各校の国語のベテランの教師から音読の意義を学ぶ事も大切であると考える。 (西里小学校 川越 雅彦)

＜西里小学校＞

1 学力調査等の分析と課題

○学力調査から見られる本校の課題

①国語

- ・目的を意識して、中心となる語や文を見つけて要約すること。
- ・文章と図表などを結び付けるなどして、必要な情報を見付けること。
- ・文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめること。
- ・話の中心を意識して聞くこと、目的に応じて話の内容をとらえること。
- ・要点をとらえること、心情を読み取ること。

②算数

- ・伴って変わる二つの数量が比例の関係にあることを用いて、知りたい数量の大きさの求め方と答えを式や言葉を用いて記述すること。
- ・正三角形の意味や性質について理解すること。
- ・加法と乗法の混合した整数の計算をしたり、分配法則を用いたりすること。
- ・(2位数)÷(1位数)の筆算について、図を基に、各段階の商の意味を考えること。
- ・百分率で表された割合について理解すること。
- ・二次元の表から、条件に合う数を読み取ること。
- ・測定・データの活用(平均、複数グラフの読み取り、表やグラフの考察等)
- ・割合、百分率の表し方と求め方、速さについて。

2 学校で育成したい資質・能力

ア 情報を正確に読み取る力(知識・技能)

イ 課題を立て、情報を集め整理・分析し、まとめ、表現する力(思考力・判断力・表現力)

ウ 目標達成に向け、協働し、粘り強く取り組む態度(学びに向かう力・人間性)

3 資質・能力を身に付けるための主な指導・取組み(授業改善)

- ・学校として育成を目指す資質・能力の共通理解を行い、学年の重点目標とめざす具体的な児童の姿を設定する。重点目標に対する児童の現状と課題を考察した上でカリキュラム・マネジメント表を作成し授業改善に取り組む。
- ・「課題の設定」「情報収集」「整理・分析」「まとめ・表現」の一連の過程を充実させ、主体的・協働的に解決に取り組むことができる探究的学習の授業づくりを進める。
- ・子ども理解を大事にした、あたたかな学級づくりを行う。
- ・子どもの学ぶ意欲を尊重する、自分で考えて表現することを促す、交流できる場の設定・工夫を行うなどを積み重ね、子ども自身の学ぶ力を育てる。
- ・児童の実態から授業を構成し、学習のねらいを明確にして、児童主体の授業をつくる。また、基礎・基本の定着のために、個別指導を効果的に取り入れる。
- ・学校生活全般を通して、児童自身がPDCAサイクルを意識して取り組むことを推進し、学校生活を自分たちの力でよりよくしようとする姿を育てる。
- ・NRT学力検査、全国学力・学習状況調査の分析と活用。落ちている点を全体で確認し、各学年の授業に生かす。

4 取組みの振り返りと児童の変容

- ・学級づくりを大切にすることで、各学級に安心・安全な風土が育っている。今後は学習のねらい、目指す姿をより明確にして、自分で考えて表現する力をさらに育成していく。
- ・学校生活全般での一人一台端末の活用、教科学習でのデジタル教科書等の活用を通して、主体的に課題に関わろうとする態度、課題や条件をとらえて考える姿勢が育った。
- ・要約する、考えをまとめる、求め方を考えて記述するなどについては、学年に応じて、読む経験・書く経験を意図的・継続的に積み重ねていく必要がある。

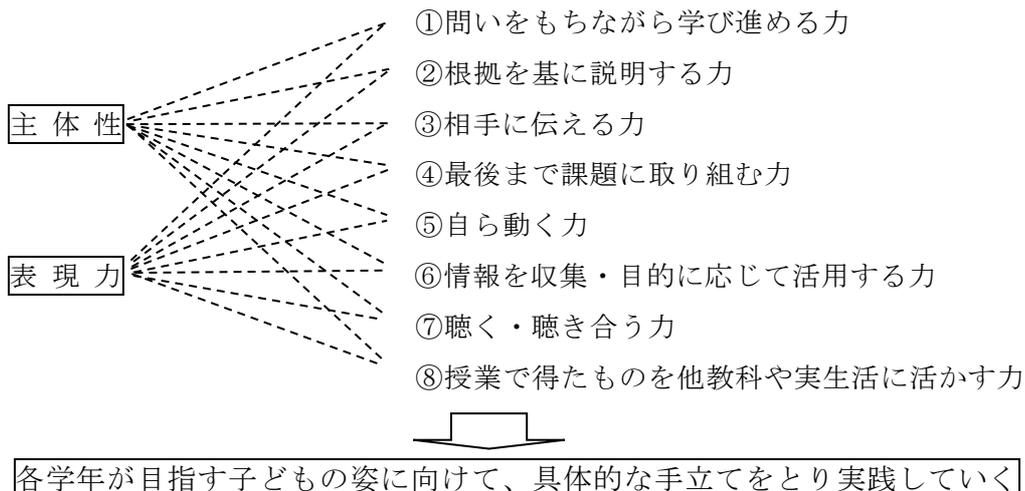
<河北町立溝延小学校>

1 学力調査等の分析と課題

- ・分析では、全国の通過率や平均と比較して、課題や強みを把握した。サンプル数の少ないデータに一喜一憂せず、本校で捉えている「育成したい資質・能力」を教師同士の対話によって言語化し、より具体的に教育活動をマネジメントしていく必要がある。

2 学校で育成したい資質・能力

育成を目指す資質・能力を検討し、今年度は、3つの視点から2つの視点に絞った。



3 資質・能力を育成するための指導、取組み

- (1) 育成したい資質・能力を明確にしたカリ・マネ表づくりと実践の振り返り
 - ・職員同士の対話の場を設け、育成したい資質能力の具体的な手立てや振り返りの「言語化」を試みた。
- (2) 表現力のひとつ「書く」活動の実践にむけた取組み
 - ・同僚性を生かしたベテラン教員による「楽しい作文指導」の研修会を実施した。
- (3) 地域や学校で育成したい資質・能力を共有
 - ・教育課程編成会議・学校運営協議会で、「学校教育目標を具現化するためのカリキュラム・マネジメントプラン」を囲んだワークショップを実施した。

4 取組みの振り返りと児童の変容

- ・育成したい資質・能力を具現化するにあたって「壁になっていることは何か」「壁を乗り越えるためのアイデア」などを互いに言語化することは意義があった。たとえば、「発表集会って必要なの?」「表現力ってつくの?」「別の発表の形があってもいい」「他校と交流し、総合の取組みを話したり、聞いたり」「他の学年と交流しながらイベントしたり、研修センターで地域の人に発表したり」「じゃあ、普段の授業で、〇〇ができないかな」と、具体的なマネジメントにつながる場面が生まれた。
- ・職員室で、本校で育成を目指す資質・能力（2視点8項目）を具体的なエピソードベースで語られるようになった。学校生活や学習活動における児童の作文（振り返り）や会話内容の変容が、数多く話題に上るようになった。

〈谷地中部小学校〉

1 学力調査等の分析と課題 (NRT・全国学力調査・県学力調査から捉えた本校の課題)

【国語】

- ・文章の種類や情報の関係についてその特徴を捉える力
- ・目的に応じて文章と図表を結び付け、必要な情報を見つける力
- ・資料や文章を読んで理解したことに基づいて自分の考えをまとめる力

【算数】

- ・二つの数量の関係に着目し、表や式を用いて変化や対応の特徴を考察する力
- ・判断した理由を言葉や数を用いて説明する力
- ・求め方と答えを式や言葉を用いて記述し、その結果が条件に当てはまるか判断する力

2 学校で育成したい資質・能力

- ・主体的に学び、協働的に取り組む力
- ・自分や友達のよさを知り、互いに助け合う力
- ・目標にチャレンジし、失敗しても立ち上がる力
- ・地域のよさを知り、その良さを発信する力

3 資質・能力を育成するための指導、取組み

- ・学校研究における授業改善の視点を生かして、日々の授業を行う。「生活科」と「総合的な学習の時間」を学校研究の窓口として、各教科で身に付けた資質・能力を、活用したり、定着を図ったりしていく。
- ・各教科でねらっている「資質・能力」と「生活科」及び「総合的な学習の時間」の学習・活動内容を結び、カリ・マネ表を作成、活用する。
- ・アクションプランを作成・共有・活用することを通して、日頃からつけたい力や資質・能力を意識した指導を行い、授業を改善していく。
- ・ICTを活用し、意欲の向上、教材や意見の可視化、個別の探究活動を進めていく。

4 取組みの振り返りと児童の変容

- ・単元計画を児童と共に作り、課題を自分事として受け止め、自分の考えを友達に伝えたり、友達の考えを聞いて自分の考えを深めたりする姿が見られた。
- ・読解力や要約力等をつけようと、読む活動を意識して取り入れながら学習を進めてきた。少しずつ力がついてきている。
- ・根拠を基に理由を明らかにして自分の考えを話したり、書いたりできるようになってきた。
- ・振り返りの視点を示すことで、自分の学びの成長や友達と学習するよさについて見つめ、実感できるようになった。
- ・学年が上がるにつれて、行事や児童会活動において自分たちの力で進めていこうと粘り強く取り組む姿が見られた。
- ・今後もカリ・マネ表やアクションプランを活用し、PDCAサイクルで進めていく。

〈谷地南部小学校〉

1 学力調査等の分析と課題（全国学力調査から捉えた本校の課題）

【国語】

- ・有効な資料を使って、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができる。
- ・文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめることができる。

【算数】

- ・三角形の面積の公式を活用し、面積の大小を判断し、その理由を言葉や数を用いて説明できる。
- ・比例の性質を利用して求める数を式や言葉を使って説明できる。

2 学校で育成したい資質・能力

知識・技能

相手の話をしっかり聞いたり，問題文に書いてある内容を読んだりして理解する力

思考力・判断力・表現力

目的や意図に応じて，理由を明確にして伝えたり書いたりできるようにする力

学びに向かう力・人間性

各教科で身に付けた知識・技能や見方・考え方を活用し総合的な学習の時間・生活科の学習を中心に活用しようとする態度

3 資質・能力を育成するための指導、取組み

授業の中で各担任が次の点を意識して授業を行うこととした。

- ①音読により，語彙力を増やす。
 - ②要約する能力 説明文の文章構成・物語文のあらすじをとらえ，後半の言語活動につなげる単元計画にする。
 - ③単元を通してつきたい力を視点に振り返りを自分の言葉で書く。
 - ④批判的な見方でも文章を読み，考えを説明できるようにする。
- 読解力は，単元を通して意図的に取り組むことにより効果があると考え。聞く力や問題文をしっかり理解するための音読場面，書くことへの苦手意識の解消と表現力を育成するための書く活動，自分の言葉で説明できるよう教師が問い返す場面から，自ら問い返すことを身に付けられるようにし，情報を分析し，根拠をもとに考えを整理し考察できるようにしていく。

4 取組みの振り返りと児童の変容

各学年で単元を通じた読解力の育成を担当が意識して，取り組んだことで読むことや書くことへの抵抗感・苦手意識が少しずつ減ってきている。また，上学年での問い返しや説明場面を設けることにより，相手の話をしっかり聞くようになってきた。さらに，自分の言葉で話すことで，生きた知識として身につけてきている。今後もこれらの取り組みを，PDCA サイクルを活用しながら継続していく。

＜谷地西部小学校＞

1 学力調査等の分析と課題（全国学力調査からとらえた本校の課題）

【国語】○必要なことを質問しながら聞き、話し手の意図や自分が聞きたいことの中心を伝えることができる。

○目的を意識して、中心となる語や文を見つけて要約する。

【算数】○伴って変わる二つの数量の関係が、比較の関係ではないことを説明するために、表の中の適切な数の組を用いる。

○示された日常生活の場面を理解し、小数の加法や乗法を用いて、求め方と答えを式や言葉を用いて記述し、その結果から条件に当てはまるかを判断できる。

▼高さが等しい三角形について、底辺と面積の関係を基に面積の大小を判断し、その理由を言葉や数を用いて記述できる。（5年）

△（ ）を用いた式や、加法と乗法の混合した式を場面と関連付けて読み取ることができる。（4年）

【質問紙】○国語や算数の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役立つと思う。

△休日の家庭学習時間が短い。学校の授業以外で英語を使うことが少ない。

2 学校で育成したい資質・能力

自ら行動する力 【主体的な学び】	人を大切にする力 【対話的な学び】	考え抜く力 【深い学び】
---------------------	----------------------	-----------------

共感的に学び合う土台作り(学級経営)

3 資質・能力を身につけるための指導、取組み

- ・単元計画の中に目指すゴールと育てたい資質・能力を児童に示す。
- ・学年に応じた両間接指導を意識した授業展開を行う。
- ・相手や学習対象、自己対話に必要な力の共有化と系統的な整備を行う。
- ・個別最適な学びにつながる学習材の精選やタブレットの有効活用をする。
- ・深い学びにつながる振り返りを価値づけする。
- ・自分の考えを、適切な表現で、相手を意識して伝える場の設定をする。
- ・共感的・批判的なものの見方をしながら、話し合わせる。
- ・既習事項との違いを確認し、根拠として使える表・グラフ・式などの情報を整理してまとめる。

4 取組みの振り返りと児童の変容

- ・低・中学年では、非認知能力を高めるために、一人一人が心を開くことのできる学級の雰囲気づくりをするよう努力してきた。友達の発言を否定する言い方は減ってきており、少しずつ共感的に話が聞けるようになってきた。
- ・低・中学年では、学習課題から各自学びのめあてを立てて学びを進めたり、振り返りを次時の学習につなげたりするカードを活用し、自己調整力が身につくように支援した。また、算数科では、6年生が4年生と一緒に復習する場を設けた。お互いに交流することで学びが深まった。
- ・高学年は、共感的に聞くことに加えて自分の考えと比べて批判的に聞くこともできるように支援してきた。また、自分たちで単元計画を作ることで学びのゴールを見通して進めたり、単元に合わせて自由進度学習をしたりできるようになってきた。
- ・生活場面の中で、子供自身が、なぜこの力が必要なのかを実感する場面が重要である。その結果、生きた力として身に付くということを、子供たちと共有していく。

＜北谷地小学校＞

1 学力検査等の分析と課題（NRT・全国学調から見えてきた課題）

①国語

- ・複数の条件に従い、文章の構成を考えながら自分の考えを書く力
- ・表現の効果を考えながら文章を読み、物語の全体像を捉えたり、場面を創造したりする力

②算数

- ・問題場면을的確に捉え、目的に応じて数の処理をする力
- ・生活場面と関連付けながら多様な考え方を見出し、生活に生かそうとする力

2 学校で育成したい資質・能力

- ・目的に応じて自分の考えをまとめる力
- ・物事に対する見方や考え方を筋道立てて表現する力
- ・一人一人が自分の考えを持ち、みんなで考えを深める力

3 資質・能力を身に付けるための指導、取組み

- ・作文や文章にまとめる活動では、文字数を指定して書かせることで、文字数を意識させたりイメージを持たせたりして感覚をつかませるようにする。
- ・読み手に自分の考えを明確に伝えるため、自分で書いた文章を読み返し、内容や表現に一貫性があるか、目的に合った構成や記述になっているか等、文や文章を整えるようにする。（友達同士での推敲等も）
- ・要点をまとめたり要約したりする学習に取り組み、キーワードを使って分かりやすい文章が書けるようにする。
- ・算数の文章問題では、式を立てたらなぜその式になったのかの根拠となることを説明させるようにする。（文章・言葉）
- ・複数の情報を整理してまとめ、必要な部分を絞って問題解決ができるようにする。
- ・かけ算やわり算の筆算の学習では、速く正確に計算ができるようになるだけでなく、筆算の意味と関連づけながら計算ができるようにする。

4 取組みの振り返りと児童の変容

- ・「自分の考えを発表したい、伝えたい」という意欲が見られたり、順序を表す言葉を使って説明できたりする子がいた。しかし、うまく説明ができない子もいたので、話す前に、内容を整理する時間や練習の時間を確保して活動に取り組みさせた。また、話し合う場や説明する場を多く設けたことで、少しずつ話す力・説明する力がついてきた。
- ・問題文に印をつけたり、数字や式の意味を問うたりしながら情報の理解に努めさせたが、問題文が長かったり情報が多かったりすると、理解が困難で正しく整理や処理ができない子が多かった。継続して指導していきたい。
- ・文章を書く活動では、字数を指定して要約させたり、説明文等の学習では、視覚化しながら文章の分析を行い、自分が書く時の参考にさせたりしたことで、目的に合った文章を書くことができるようになってきている。しかし、主語と述語が合わなかったり内容が乏しい子がいたりするので、文章を書く機会を多く設け、学年に応じてペア学習やグループ学習を取り入れながら指導していきたい。
- ・算数で学習したことを日常生活に生かせるように、実物を使ったり日常生活場面の例を挙げたりしながら指導したことで、学習したことを基に解決しようとしている姿が見られた。

＜河北中学校＞

1 全国学力調査等の分析と課題

- ①基礎・基本と忍耐強く考える力が不足している。
- ②何を問われているか正確に理解できず、根拠に基づいた説明や記述に苦手意識がある。
- ③自信のなさから周囲を気にするため、自分の意見や考えを伝えることに抵抗がある。
- ④身につけたものを日常に生かす意識や工夫が足りない。

2 学校で育成したい資質・能力

【知識・技能】

- ア 基礎基本の知識・技能を身につけ、他の学習や生活の場面においても活用できる力
- イ 情報を的確に読み取り活用する力

【思考力・判断力・表現力】

- ウ 理解したことを根拠・理由を明確にしながら相手に伝わるよう説明・発信できる力（「話す・聴く・書く」場面の意図的設定）
- エ 学習事項を、教科や学年を超えて関連・統合して考える力

【学びに向かう力・人間性】

- オ 目標達成への見通しを持って、粘り強く学習に取り組む力
- カ 自らの学習を調整しながら学び、日常に活かす力

3 資質・能力を身につけるための指導、取組み（特に重点として）

- ア 各教科で必要に応じたドリル学習の時間設定と定着の工夫
- ア NRT アシストシートを確実に活用(今年度から1, 2年生は実力テスト→CRT)
- アウ 学習指導部から提案し掲示している「学習の約束」を活用した節ごとの重点掲示
- アウ 「話し方」・「聴き方」のスキルを身につけるための工夫
- アイウ ICT 機器の効果的活用
- アイウ 付箋紙を活用した学習の推進
- ウエ 対話を意図的に取り入れた単元設定（学校研究との連携）
- オ 単元を貫くゴールを明示した授業
- オカ 自己調整力をつけるための振り返りの仕方と場の吟味
- その他 全教員（担任、教科担任、部活動顧問等）での「安心して自己表現ができる集団作り」

4 取組みの振り返りと児童の変容

- 昨年度に引き続き、職員全員でアクションプランを通した生徒のことをたくさん話し合う機会を設けることができた。（学年会、指導部会、教科部会、研修会、職員会議）それによってPDCAサイクルが機能し、教師側の意識の高まりが見られた。
- ゴールを明確にした単元構成の工夫（2年目）をすることで、何のためにどういう学びをしていくのかを生徒が見通しと課題意識を持って学習する姿がさらに見られた。
- 全教育活動を通じて振り返りを吟味するようになり、その場限りの活動で終わることがなくなった。
- 具体的なスキルを身につけさせることで、「話す・聴く」力が多少なりとも向上した。
- △基礎・基本につながるドリル学習がまだ不足している。計画的な取組みがさらに必要である。
- △ICTの活用は進んでいるが、研修を含めさらに推進していく必要がある。
- △学習においても大きな土台となる学級作りに、さらに力を入れていく。担任だけではなく、全職員が意識的に取り組むことで安心して自己表現ができる集団にもつなげる。

生徒指導部会

I テーマ

健全な児童生徒の育成に向けた対応の仕方と
規範意識の向上を目指した情報交換の充実

II 活動の内容

1 第1回生徒指導部会（講話）

- (1) 日時 令和5年7月13日（木） 河北町立北谷地小学校
- (2) 講話 「生徒指導提要の改訂について」
- (3) 講師 高橋 朋昭 氏（河北町立北谷地小学校 教頭）
- (4) 内容

第I部「生徒指導の基本的な進め方」

① 生徒指導の目的

「自己指導能力」を獲得する。
（自らの行動を決断し実行する力）

② 生徒指導の実践上の視点

- ア 自己存在感の感受
- イ 共感的な人間関係の育成
- ウ 自己決定の場の設定
- エ 安全・安心な風土の醸成



第II部「個別の課題に対する生徒指導」

① 「いじめ」防止につながる発達支持的生徒指導

- ・「いろいろな人がいた方がよい」と思えるような働きかけ。
- ・「自分のやろうとすることが認められ、応援してもらっている」と感じる。
- ・「助けて」と言える雰囲気、しっかり受け止めることができる体制。

② 「暴力行為」防止につながる発達支持的生徒指導

- ・「暴力を振るってもいい暴力も仕方ない」という誤った認識を持たせない。
- ・人への思いやり、助け合いの心、日々の挨拶、声かけ、対話。

③ 「少年非行」防止につながる発達支持的生徒指導

- ・教職員は、児童生徒と境界線を挟んで対峙するのではなく、その境界線をまたいで児童生徒の隣に立って接するという姿勢。
- ・どう対応するかを一緒に考える姿勢。

④「自殺」予防につながる発達支持的生徒指導

- ・「誰も自分のことなんか考えていない，自分なんか生きていても仕方がない」など，心理的危機に陥らないような，陥ったとしても抜け出せるような思考や姿勢を身につける。
- ・「心の危機に気づく力」と「相談する力」。

⑤「不登校」対策につながる発達支持的生徒指導

- ・「自分という存在が大事にされている，学校が自分にとって大切な意味のある場になっている」と実感できる学級づくり。
- ・「どの児童生徒も分かる授業，どの児童生徒にとっても面白い授業」

2 第2回生徒指導部会（情報交換）

(1) 日時 令和5年12月7日（木） 河北町立北谷地小学校

(2) 内容

「いじめ・不登校」に対する各校の取り組みについて（助言者より）

○村山教育事務所 指導主事 松下 尚樹 氏より

- ・子どもの背景を見る。ケース会議を行いチームで分析をする。S C, S S W, 警察など，別な視点で分析をする。
- ・保護者との関係がこじれないように。保護者と児童が何を求めているか，どのように対応していくのか合意形成が大事である。
- ・未然防止を日頃からいかに行うことができるか，授業をどう充実していくかを改めて大事にしてほしい。

○エリアスクールソーシャルワーカー 高橋 啓二 氏より

- ・A S S Wに話があがってくる頃には保護者どこじれていることが多いので，早めに相談してほしい。クレームを言ってくる保護者がいると思うが，学校との関係がよくなると，子どももよくなる。

○青少年担当 警察O B 大木 隆幸 氏より

- ・警察に気軽に相談してほしい。特性や事案のニーズに合わせて対応できる。学校警察連絡制度や少年サポートセンターなど，幅広く対応できる。

Ⅲ 成果と課題（○成果，▲課題）

○「いじめ・不登校」に対する各校の具体的な取り組みについて情報交換することができた。また，村山教育事務所の「生徒指導支援チーム」の方から，多様な視点で助言をいただいたことは有意義だった。

▲警察に話すと，非行歴がついてしまうのではないか，進路に響くのではないかなど不安になるが，まずは相談することが重要である。

（北谷地小学校 高橋 朋昭）

特別支援学級部会

I テーマ

特別支援学級在籍児童生徒が進学や就労するにあたり，どんな力をつけていくべきか研修し，学校と家庭とで共通理解を図る。

II 活動の内容

1 特別支援学級部会研修会

(1) ◇日時 5月23日(火) 15:00～16:30

◇場所 河北町役場 301会議室

◇参加対象 本部会所属教員，町内特別支援学級在籍児童生徒の保護者

(2) ◇講話「特別支援学級在籍児童生徒の進学・就労に関わって」

◇講師 山形県立楯岡特別支援学校大江校

進路指導主事 成原 由希 教諭 鏡 由紀子 教諭

(3) 講演内容

① 楯岡特別支援学校高等部卒業後の就労に関わって

ア 高等部卒業後の進路選択

- 一般就労
- 福祉的就労・・・就労継続支援A型事業所，就労継続支援B型事業所
就労移行支援事業所
- 生活介護・・・生活介護事業所（通所・入所施設）

イ 西村山地域の事業所

ウ 就労するにあたって必要なこと

- 自分に合う仕事と職場を探す・・・現場実習，職場見学
- 生活習慣を整える・・・職業準備性のピラミッド
・健康管理→日常生活管理→対人技能→基本的労働習慣→職業適性

エ 大江校高等部での実践

- 日常生活の習慣づくり・・・自分のことは自分でできる。
- 役に立つ経験の積み重ね・・・家事手伝いの継続，係の仕事への挑戦
- 家庭と学校が連携して育てていくという支援

② 特別支援学級在籍児童生徒の進学に関わって

ア 楯岡特別支援学校大江校の紹介（教育課程・学習内容）

○ 学校の教育目標

『「チャレンジ」と「関わり」を楽しみ，よりよく生きる人を育てる。』

- めざす生徒像
 - ・ 明るく挨拶し元気に活動する人（いのち） 明朗 健康
 - ・ 自ら考え進んでチャレンジする人（まなび） 主体性 意欲
 - ・ 思いを伝え合い仲間と協力する人（つながり）
- コミュニケーション 社会性

- 「各教科等を合わせた指導」を中心に教育課程を編成

イ 作業学習とは（大江校において）

- 働くために必要な知識，技能を体験的に学ぶ学習。
- 中学部においては基礎や自分で取り組む力を身に付けること，高等部においては，仲間と協力・分担して製品を作ることを通して，作ることに関する知識技能だけでなく，挨拶，報告，伝達などを含む「働く力」を育てることがねらい。

ウ 進学の流れ

- 中学部への進学・・・市町村教委への相談→特支校へ連絡
- 高等部への進学・・・在籍校担任等と相談→入選説明会（本人の体験可）
- 進路を考えるにあたって・・・現在の姿，将来の姿から考える。

エ 学校，家庭で共通して大切にしたいこと

- 基本的な生活習慣の定着・・・年齢や発達段階に応じて自分で管理できることを増やす。身だしなみ，早寝早起き 等
- 働く良さに気づく・・・学級や家庭での係，役割をもち，しっかりとこなす。ありがとうと言われる経験 等
- 生活ルールとマナー，礼儀を守る・・・時間や順番を守る，お礼 等
- 対人コミュニケーションの構築・・・挨拶と返事，場に適する音量 等

オ 自立に向けて学校で大切にしたいこと

- 小中高支援の一貫性・・・学校が変わるたびにゼロスタートにしない。
- 大人を信頼できる関係作り・・・近くにいる大人に「助けて」「困った」が言えるように。
- 地域の基盤作り・・・地域の関係機関の情報を伝える。
- 「私の将来像」を描く
 - ・ 大人になる→やってみたいことが増える→楽しみがもてる→「そのために今はこれを頑張るぞ！！」

Ⅲ 成果と課題

- 子どもたちの将来を見据え，どんな力が必要なのか，具体的に知る機会となった。多くの保護者にも参加していただいたので，家庭と共通理解しながら，今回学んだことを今後の指導と支援に生かしていきたい。（谷地南部小学校 安達美和子）

保健部会

I テーマ

『養護教諭の執務の向上』

II 活動内容

1 第3回保健部会 【研修会】

(1) 日時・場所 令和5年9月14日(木)

15:00~17:00 河北町役場 301 会議室

(2) 講話テーマ 「命を守るために伝えたいこと～大人になりゆく子供たちへ～」

(3) 講師 真理子レディースクリニック 伊藤真理子先生

(4) 講話の内容

真理子先生が小・中学生向けに行っている実際の講演内容をもとにお話をしてくださった。またその講話の後には、HPV ワクチンについてのより詳しいお話もしてくださった。

○小学校5 & 6年生、中学生向けの事前アンケートの内容紹介

(今あなたは思春期ですか?、身体のことでは心配なことはありますか?など)

○小学生用の内容(資料より一部記載):

思春期は子供の体から大人の体に変化する時期、思春期の身体と心とまどい、二次性徴(時期や男女の体の具体的な変化)、生理や月経困難症、妊娠のしくみ、出産(赤ちゃんが生まれるのに必要な時間、赤ちゃんが生まれる平均の大きさなど)、たばこ(日本の喫煙率(世界の喫煙率と比較)、たばこの煙には4000種類以上の化学物質が含まれ、そのうち約60種類に発がん性が確認されている)、ニコチン依存症についてなど)

○中学生の内容(小学生と同じ内容の部分あり、その他の内容について資料より一部記載):

LGBT、摂食障害、月経異常(月経前緊張症(PMS)、月経困難症、子宮内膜症など)、ピル、月経調節、性感染症(クラミジア感染症、トリコモナス膣炎、カンジダ膣外陰炎、エイズ、子宮頸がんなど)、HPV ワクチン、緊急避妊、子宮外妊娠、嫌なことはノー!と言える勇気を持つこと

小・中学生どちらの講話の中でも、体や心の変化について子供達が不思議に思っていることに対して先生が答える質疑応答の時間が設けられていた。

○HPV ワクチンについて(資料より一部記載)

ヒトパピローマウイルス(HPV)、9価ワクチン、ワクチンと検診の意味、男性の



HPV ワクチン接種、HPV ワクチンの副反応、接種率95%以上を達成している西川町の紹介、実際に寄せられた保護者からの質問に対する先生の回答

【お話をお聞きしての感想（一部抜粋）】

- ・お金がないことより知識がないことが1番おっかないことなんだと聞いて、思春期にさしかかり、体が成長していくなかで不安や心配なことがたくさんある状態であるからこそ、正しい性についての知識を教えていかなければならないと思いました。小学生に教える時、まだ先のことで自分事に捉えられないと思っていることを、自分事に思えるように教えていくのは難しいことではありますが、がんばっていきたいと思いました。
- ・自立＝大人になるということ。自分の力だけで生きていくと考えてしまいがちですが、「依存先を増やすことが自立すること」とお聞きし、「依存先を増やすこと」を伝え続けていきたいと思いました。
- ・「月経は自分で支配できる時代です。～痛みも時期も回数も～」という言葉に救われました。PMS（月経前緊張症）でつらい日々を送ったり、部活動で日々努力してきたのに当日生理と重なりパフォーマンスが十分に発揮できなかつたり…という姿を見ていると、正しい知識を持ち、その先の方向性を示せる保健室でありたいなと改めて思いました。
- ・HPV ワクチンについて、日本は他国と比較し接種率が低いとのことですが、10年前の西川町では学校と教育委員会、町役場が連携し集団接種を行うことで95%の接種率を達成することができたことを考えると、眞理子先生が目指している接種率100%も、河北町全体で取り組むことで目指せるのではないかと思います。

2 第4回保健部会

- (1) 日時・場所 令和6年1月19日（金） 河北町役場 相談室
- (2) 内容 今年度の反省と来年度の研修についての話し合い

Ⅲ 成果と課題（○成果 ▲課題）

○性教育について、どのように行ったらよいのか日々悩んでいる中で、産婦人科の先生から実際に講話で子供達に伝えている正しい知識や性についての考え方などを教えていただくことができ、大変大きな学びとなった。今回学んだことを、日々の関わりの中や集団指導の場など、それぞれの養護教諭ができるところから子供達に伝えていきたい。

▲今回の研修の題材の性教育以外にも日々様々な疑問や悩みに直面している。子供達に関わる上で、これからも町内養護教諭同士が密に関わり、こまめに情報共有しながら対応していけるように環境を整えていく必要がある。

（西里小学校 高橋春菜）

小中実践交流会

I 研究主題

生き生きと学び、自立に向かう生徒の育成(2年次)

II 主題設定の理由

本校の学校教育目標である「つながりの中で自立する生徒の育成」を踏まえ、昨年度より上記の研究主題を設定し、研鑽に励んできた。

本校の生徒は、素直さと真面目さを生かして、さまざまな活動に意欲的に取り組むことができる反面、失敗を恐れて指示待ちになったり、積極性に欠けたりする一面も見られる。そういった生徒の実態を踏まえ、学校全体で教科を通して育みたい具体的な「自立に向かう生徒の姿」を、

①課題意識を持ち、周囲とのつながりから学び、自己表現する生徒

②目標に向かって、自らの学びを振り返り、工夫・改善する生徒

とし、アクションプランを活用しながら、「自己調整力」「思考力・判断力・表現力」「自己肯定感」「コミュニケーション力」を複雑に関連付け、その具現化を目指すものである。

III 研究の実際

1 研究の視点

研究主題に迫るために、以下の2つの【視点】を重視して研究にあたる。

【視点1】対話的な学びにつなげる言語活動の工夫

【視点2】学びを整理し、次につなげる振り返りの工夫

【視点1】は、「言語活動の工夫」である。「個人・ペア・グループ」といった学習形態はもとより、生徒の実態に即した必要感のある言語活動を設定することで、「自分・他者・もの」とのより深い対話を進め、学びの深化を目指す。

【視点2】は、「振り返りの工夫」である。「学びを整理し」とは、学習の成果や課題を明確にしたり、疑問点について自分なりの考えをまとめたりする姿と捉える。これらを通して、自らの学びを客観視させるとともに、次の学習へのつながりを持たせ、学習意欲の向上を目指す。

これまでも大切にしてきた「基礎基本の定着」を根底に置きながら、以上2つの【視点】を持って研究を進め、主題に迫っていく。

2 授業参観の視点

授業を参観する際のポイントを「生徒の様子」に置き、表情や仕草、反応や発言から、考えの変容や深まり、成果や課題を見出していくことで、より「生徒」の目線に立った授業づくりを目指す。

3 小中実践交流会

今年度の小中実践交流会では、各学年で一つずつ授業を公開した。たくさんの先生方に生徒の姿を見ていただき、その発言や様子から、学びの広がりや深まりについてご意見をいただいた。

(1) 3年生 理科 単元名「水溶液とイオン」～酸・アルカリとイオン～

理科では自立に向かう生徒の姿を「身の周りのことに興味関心や疑問を持ち、解決方法を探求する生徒」と捉える。公開した単元における、研究の【視点】との関連は以下の通りである。

【視点1】対話的な学びにつなげる言語活動の工夫

- ・自ら調べたくなるような、身近で必要感をもてる課題を、単元を通して設定する。
- ・目に見えない事象について、自らの考えが妥当か根拠をもとに考察していく中で、周りの意見に触れ、考えを広げたり深めたりさせる。

グループ協議でのご意見

- 単元を貫く課題がとても良かった。
- 書き込みのできるA4ファイルの活用により、話し合い活動が活発になっていた。
- ▲既習事項の電池の学習内容がしっかり定着していたからこそ、本授業での思考の妨げやミスリードになっていた。
- ▲実験の中で何を確かめるかを明確にするとさらに学びが深まるように感じた。

【視点2】学びを整理し、次につなげる振り返りの工夫

- ・生徒自ら単元の学びを常に確認できるように、単元を通して振り返りシートを活用させる。
- ・学習前後で単元を貫く課題に対する自らの考えを比較することで、自らの成長を振り返ることができるようにする。

グループ協議でのご意見

- ▲工夫としてシートを使うだけではなく、目的に合わせた方法を探す。
- ▲まとめ、振り返りがもったいなかった。何の活動だったのかがわかるようにするとよい。

(2) 2年生 英語科 単元名「Unit6 Research Your Topic」

英語科では自立に向かう生徒の姿を「課題意識を持ち、周囲とつながりながら学び、自己表現する生徒」「目標に向かって自らの学びを振り返り、工夫改善する生徒」と捉える。公開した単元における、研究の【視点】との関連は以下の通りである。

【視点1】対話的な学びにつなげる言語活動の工夫

- ・自らが設定したテーマを発表するために、クラスメイトにインタビューをして情報を集めさせる。

グループ協議でのご意見

- 身近な話題の設定がなされていて生徒たちが考えやすかった。(肉そばの話題)
- 生徒たちがお互いに関わり合いながら授業が進められていた。
- ワークシートも段階的に作られていたので生徒たちも考えやすかった。
- ▲スペルミスや文法上のミスなどについてもっと指導が必要であった。
- ▲グループワークやペアワークの場面では、より多くの生徒と関わることができるようにする工夫が必要であった。

【視点2】学びを整理し、次につなげる振り返りの工夫

- ・振り返りシートに既習の表現を用いて表現した英作文を書きため、それが最終の発表の原稿につながるようにさせる。

グループ協議でのご意見

- 単元全体の計画を見通した振り返りの工夫がなされていた。
- ▲振り返りの取り組み方の工夫が必要。1人で書かせる場面と複数の生徒たちが関わり合いながら取り組む振り返りがあってもよかったのではないか。
- ▲まとめ方の例示があってもよかった。

(3) 1年生 道徳科 主題名「だれもが気持ちよく過ごせる社会を目指して」

道徳科では、自立に向かう生徒の姿を「道徳的心情を深め、高い価値観の中でよりよい生き方について考えようとする生徒」と捉える。公開した主題における、今年度の研究の

【視点】との関連は以下の通りである。

【視点1】対話的な学びにつなげる言語活動の工夫

- ・課題を通して自分の考えをまとめ、議論を通じて他者の異なる考えにふれながら考えを練り合うことで、よりよく生きるための方法についての自分の考えを深めさせる。

グループ協議でのご意見

- 付箋の活用により、自分の考えを表現したり意見の変容が見えたりして効果的だった。
- 自分の考えを全員が書けていた。
- ☆自分の立場をA B C Dに明確には決められない。数直線や心情円、表などで表すとその根拠を述べるのが、対話にもつながる。
- ☆話し合う視点を寄り明確にした方が課題に迫ることができたのではないか。
- ☆意見交流の時間が短く、構成を見直したほうがより深まりや広がりが見られる。

【視点2】学びを整理し、次につなげる振り返りの工夫

- ・周りの生徒との意見交流や議論等の活動を通じて道徳的判断力や道徳的心情を養い、振り返りを通してよりよい生き方について考えを深め、実践意欲を養う。

グループ協議でのご意見

○言語活動を経たことで変容が見られた。

▲課題と振り返りのつながりが見られなかった。着地点がどこかを明確にした方がいい。

▲公德心を自分事として捉えられなかったように思える。

☆「コンビニゴミ箱」についての話題を導入に持ってきたほうがより効果的だったのではないか。

☆前半をすっきりさせ（教材をあらかじめ読ませる等）、交流の時間を確保する方が良い。

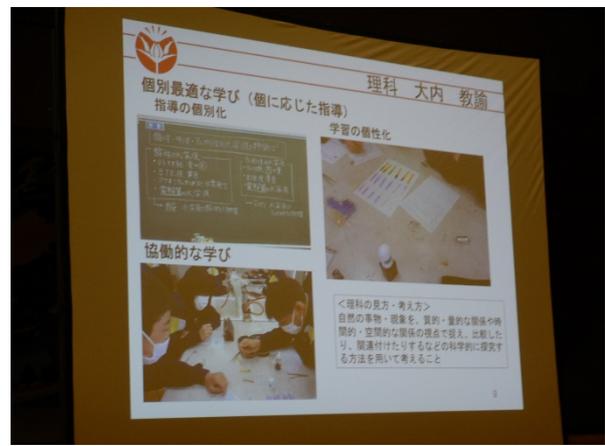
IV 成果と課題

○河北町教育研究所の事業として小中実践交流会を開催し、校種・教科横断的な視点での情報交換ができた。

○すべての学年を公開したことにより、生徒の成長の過程を見ていただくことができた。

○小学校での学習活動や学習習慣をお聞きし、中学校とより密接に連携していくことで、さらなる力の上積みにつながると感じる事ができた。

○▲小学校での実践をお聞きしたり、異なる視点でご意見をいただいたりすることは大変学びの多いことであった。さらなる力の高まりや、力の上積みのために、「小と小」の交流にも重点が置かれると、小中の連携がさらに密接なものとなるように感じた。



(高橋 拓也)

学校研究

I 研究主題

自らまなびをつくる子どもの育成（2年次）

— 子どもが主体的に学ぶ授業づくり・学級づくりを通して —

II 主題設定の理由

本校はこれまで「自ら学びをつくる子どもの育成」を研究主題に設定し、探究的学習の授業づくりとあたたかな学級経営を両輪として研究を重ねてきた。

今年度は、研究のねらいの中にある「子ども自身の学ぶ力（学び方）を育てる」という点について焦点を当てた。「教師が進める授業の中で主体的に学ぶ」ということから、「子ども自身が課題に向き合い、自分に合った取り組み方で主体的に課題解決を行っていく」授業づくりを目指し、研究教科・領域を全教科に広げ、授業改善を進めてきた。

III 研究の実際

1 めざす子ども像

主体的に考え、聴き合いながら、互いに高め合う子ども

2 研究の方針

(1) 探究的学習の授業づくり

- ・子ども達が目的意識を持ち、主体的に学習に取り組むことができる「単元計画の工夫」
- ・子ども達にとって必要感のある「課題設定の工夫」
- ・子ども達が目的や内容を明確に持ち、主体的に「交流できる場の設定・工夫」
- ・子ども達の学びを見とる「評価の工夫」

(2) 子ども理解〈児童の実態及び内面の見とり、授業における一人一人の見とり〉

(3) 子ども自身の学ぶ力（学び方）の育成

〈内発的動機付けを促す、身につけたい力の把握、学びの振り返り・自己評価、自分の「よさ」の自覚化〉

- ・子どもが進める授業スタイル、単元内自由進捗学習、個人総合などの実践

(4) 研究の日常化〈「つけたい力」を柱にしたカリキュラム・マネジメント、学級経営、家庭学習の取り組み、OJTの推進〉

3 授業の実際

学年	教科・単元	学習活動	子どもの姿
一年	算数 かたちあそび	たくさんの立体を実際に触りながら、似ているところや違いに着目し、仲間分けして交流した。	箱や缶の仲間分けをする中で、子どもたちが「たいら」「転がる」「丸い」など、形の特徴を言葉で説明しようとする姿が多く見られた。子どもたちが自由に話したり、教師が問い返したりしながら、四つの形に分類していった。

二年	算数 3けたの数	780がどんな数かを、カードや数直線、式などの多様な方法で表現し、交流した。	780という数を表現するために、ブロックやストローなど自分に合った物を使い、伝え合う姿が見られた。できるだけわかりやすく伝えるために、文だけでなく矢印や図を使う子も多かった。
三年	社会 農家のしごと (さくらんぼづくり)	さくらんぼ農家の見学から気付いた工夫や努力について、タブレットを用いて交流した。	地域のさくらんぼ農家の見学の際に、自分で撮影してきた写真の中から1枚を選び、それについて気付いた農家の工夫について、タブレットを用いて交流したりまとめたりした。子どもたちがICTを日常的に活用している様子が見られた。
四年	国語 一つの花	登場人物の行動や会話に着目して、気持ちや世の中の様子、出来事などを読み取り交流した。	第1・2場面と比べながら、第3場面での登場人物の気持ちや世の中の様子について読み取っていった。読み取った内容はフリーで交流し、その後座席をU字型に配置して、自由に話せる雰囲気の中で全体交流し、読みを深めていった。
五年	算数 小数のわり算	小数のわり算のあまりについて、図や検算を用いながら考え、話し合いながらまとめていった。	教師役の児童が中心となって授業を進めた。子どもたちの言葉で、課題やまとめも含め授業が進んでいた。子どもたちは課題に真剣に向き合うとともに、教師役の子をフォローしようとするあたたかな雰囲気があった。
六年	社会 明治の国づくりを進めた人々	資料を基に、新しい政府を作っていくきっかけをつくったMVPは誰かを考え、交流した。	歴史の出来事が書かれたカードを、教科書を元にしてグループで話し合いながら並べ替えて確認していた。どの人物がMVPに当たるかは、教科書や資料集をもとに個人で考え、友達に理由とともに伝えていた。



5年算数 児童が進める授業



3年社会 ICTを活用した交流



1年算数 形に着目した仲間分け

IV 成果と課題

- どの学年でもあたたかな話し方や聞き方が定着してきており、子どもが安心して授業に取り組める雰囲気作りができています。
- タブレットやデジタル教科書の活用は日常化しており、先生方がミニ研修などで活用法について教え合う場面も多い。
- 学級経営についての視点を持ったことで、授業以外の指導法についても担任団が交流することが増え、どの世代の教師にとっても学びになった。
- ▲「授業をつくる」ということのイメージの共有が十分とは言えない部分があった。全体会で再確認し、次年度の公開に向けて3学期に各学年で授業改善に取り組むこととした。

(樋口 智一)

I 研究主題

自ら学び続ける子どもの育成（４年次）

II 主題設定の理由

1 教育目標

ふるさとだいすき …… ふるさどについて理解を深め 行動を起こす子ども
 かしこく …… 主体的に楽しく学び よりよいものを創造する子ども
 つよく …… 心身とも健康で 粘り強く取り組む子ども
 やさしく …… 自他を大切にし 思いやりのある子ども
 ～ つながりの中で わたしたちが創る 楽しい学校 ～

2 昨年度までの研究から

本校では、一昨年度から総合と生活科を核としたカリキュラム・マネジメントを行うとともに、児童の実態から「育成を目指す資質・能力」を明確にしながら日々の授業改善に取り組んできた。昨年度、実践を重ねる中で、「児童が自分事として捉え、必要感をもって学びを進めることができる課題設定」「児童がいきいきと表現できるような場づくり」を意識しながら授業改善を図ることが課題として挙げられた。

そこで、今年度は「育成を目指す資質・能力」を「主体性」と「表現力」の二点に絞り、教師が単元を通して目指す子ども像を明確にイメージしたうえで授業づくりに取り組みながら、学校教育目標の具現化に向けて「自ら学び続ける子どもの育成」を目指すこととした。

III 研究の実際

1年 国語科 くわしくかこう「しらせたいな、見せたいな」

情報を集めたり構成を考えたりして、相手に伝わるように楽しんで文章に書き表す子ども
主体性 ③相手に伝える力

◇児童が「書きたい!」「伝えたい!」という思いをもって学習に臨めるよう、「自然の家で活動したことや見つけたことの中から題材を選び、書いて家の人に知らせる」という学習課題を設定した。児童が課題を自分事として捉え、家の人により詳しく、よりわかりやすく伝えられるようにと工夫しながら「見つけたカード」を書く姿が見られた。



表現力 ⑦聴く・聴き合う力

◇言葉を引き出し合うためには「書く」前に「話す」必要があると考えて聴き合う活動を取り入れたが、上手く質問したり答えたりできない段階だった。本単元では上手く質問したり答えたりできなかったものの、児童にとって必要感のある交流の場を設定しながらお互いに聴き合う活動を継続して取り入れ、繰り返し練習した。その結果、質問の仕方や答え方が徐々に身に付き、児童自身が交流の楽しさや聴き合う活動の必要性を実感しながら学習に臨めるようになった。

4年 社会科 水害からくらしを守る

問いをもち、学習したことを実生活に活かす子ども

主体性 ①問いをもちながら学び進める力

◇溝延・田井地区は水害が起りやすい地域で、4年生の中には2年前の大雨で実際に水害を経験した児童もいる。丁寧な聴き合いを行いながら水害を経験した児童の話の掘り下げたことで、全員が水害の恐ろしさや命を守る術を身に付ける大切さを実感し、一人一人が「水害から身を守るためにどうしたらいいか」という問いを自分事として捉えて主体的に学習に臨むことができた。



表現力 ②根拠を基に説明する力

◇単元の前半で水害から身を守るための自助・共助・公助に関する知識を身に付け、後半でそれらの知識を生かしながらマイタイムラインを作るという単元構成にした。マイタイムラインを作る場面では、これまでの学習で得た知識や使用したノート・資料・掲示物等を基に、自分の考えを伝え合いながらマイタイムライン作りに取り組む児童の姿が見られた。インプットしたことをアウトプットすることで、知識をより確かなものにする事ができた。

6年 道徳科 主題名『自分の役割を果たす』 教材名「子ども会のキャンプ」

リーダーとしての役割を自覚し、責任を果たそうとする子ども

主体性 ①主題を自分事として捉え、考える力

◇ほとんどの児童が登場人物と自分を重ねながら主題について考えていたものの、自分自身の本音を語る事ができない児童が多く見られ、ねらいとする道徳的価値への気づきを深める事ができなかった。その後、自分自身の本音を表出できる学級の雰囲気をつくれるよう、児童同士のコミュニケーションの場を多く設定することを心がけた。その結果、自分自身のマイナス面を含めた本音を話す事ができる児童を増えてきた。



主体性 ⑧本時で考えたことを実生活に活かす力

◇授業で考えたことや感じたことが授業の中だけで閉じないよう、振り返りでは「これからどうしたいか」「どうなりたいか」を書くようにしている。振り返りの記述を読んでもと、それぞれが「なりたい自分」を思い描き、これからどうしていきたいかという思いをもつことができていた。その後の学校生活でも、児童が自分自身に与えられたリーダーとしての役割を自覚し、責任をもってその役割を全うしようと努力する児童の姿が見られた。

IV 成果と課題

- ペア・グループで自分の考えを表現する活動を繰り返し行ったことで、自分自身の言葉で思いや考えを表現できる児童が増えてきている。さらに力を伸ばせるよう、指導者側が適切な「出と待ち」を意識しながら児童が自分自身の言葉で生き生きと表現できる場の設定を心がけていく。
- 指導者が課題設定や単元構成を工夫したことで、児童が学習課題を自分事として捉え、自分の思いや考えをもって主体的に学びに向かうことができた。
- ▲児童側が課題設定や単元構成を考えて自ら学びを創ることができれば学びや交流に必要感が生まれ、児童の主体性や表現力をより高めることができる。教師は児童に任せられる場面を意識しながら授業づくりを行う必要がある。

I 研究主題

仲間と関わりながら、学び方を見つける子どもを育てる
～「協働的な学び」と「個別最適な学び」を目指して～

II 主題設定の理由

学校は、子どもたちが「自分をつくる」場である。多様化する社会の中、様々な価値観をもった友達の思いを聞いたり認め合ったりしながら学習に取り組むことは、将来社会に出てたくましく生きていくために必要であると考え。協働的に学び合うこと、自分の学び方を探していくことを両軸にしながら学習指導を行っていく。

本校では、これまでに培ってきた探究型学習をベースにしながら、生活科・総合的な学習の時間を重点的に取り組む教科・領域として設定してきた。加えて今年度からは、カリキュラムマネジメントの観点から、教科で身に付けた汎用的能力を生活科・総合的な学習の時間に活用するという視点で、各教科においても研鑽を重ねていく。

<授業改善の主な視点>

- 課題を自分のものとして受け止め、自分で自分の学び方をさがすための工夫
- 課題解決のために、対話的・協働的に学ぶための工夫
- 自分や友達の良さや成長を実感できるための工夫

III 研究の実際

主な成果○ 課題▲

第4学年の実践 国語科「一つの花」

<課題を自分のものとして受け止め、自分で自分の学び方をさがすための工夫>

- 課題に没頭する個の時間を持つことで、児童が自分の考えを字に表そうとする意欲を高めることにつながった。

<課題解決のために、対話的・協働的に学ぶための工夫>

- 自由交流や全体での共有では、友達の考えを自分の考えと比較して聞くことをめあてにしたことで、自分の言葉を伝えるだけでなく、友達の言葉を大切にしようとするという意識が現れていた。

- ▲ 自由交流で見られた固定化した交流関係を改善するため、たくさんの友達と関わり合える交流ルールを児童と考えながら、日々の学習につなげる。

<自分や友達の良さや成長を実感できるようにするための工夫>

- めあてに対する自分の考えを再構築することや友達と学ぶからこそ分かった自分の変



容を書き表すことで、その時間や単元を通して自分や友達を認め合う気持ちを育てることができた。

<今後生かしていきたいこと>

☆ 教師の出としての、教科書に立ち返る問い返しや児童のつぶやきや意見、考えをつなぐ役目をどの教科でも常に意識して指導していく。

☆ カリマネ表に示している単元を通して育てたい資質・能力を、学級単位だけでなく学年として意識することが大切だと感じる。教員同士が単元に入る前の情報交流や学習を終えてみての振り返りをすることで次の単元でのめあてを明確にして、それを共有しながら児童を指導していけると思う。

第5学年の実践 総合的な学習の時間「お米の残し 減らそうプロジェクト」

<課題を自分のものとして受け止め、自分で自分の学び方をさがすための工夫>

○ お米作り、各学級への残飯調査など体験活動が実感を生み、自分事として学習していた。

○ 社会のお米の学習、算数の平均の考え方など、各教科で学んだことを総合で活用しようとする姿が見られ、子どもたちも教科横断的な学習という意識があった。

▲ 本時で2つの課題を設定したが1つにしたり、2つの活動を一緒にせず時間を区切ったりした方が子どもたちも活動しやすかったように感じる。

<課題解決のために、対話的・協働的に学ぶための工夫>

○ 学年みんなで調べたデータや資料を上手に使い話し合っていた。話し合いの中で、友達の意見を否定する場面が少なく、お互いを認め合う話し合いが行われていた。

<自分や友達の良さや成長を実感できるようにするための工夫>

○ 子どもたち同士が良さを認め合える関係性ができており、それが話し合いにもいきっていた。



<今後生かしていきたいこと>

☆ 今回、たくさんのデータを準備し、それを自分たちの目的に合わせて活用できるか挑戦した。情報の取捨選択ができるように、日々の学習指導でも意識していきたい。

☆ ご指導の中で、「話し合いが成立しているからこそ、指導者がどのような声かけをすることが大切だ。」というお話をいただいた。より個や全体がレベルアップするための声かけについて考えていきたい。

IV 成果と課題

○ 今年度、カリキュラムマネジメント表を活用し、生活・総合だけでなく、汎用的能力を生活科・総合的な学習の時間に活用するという視点で各教科についても研究を重ねることができた。

▲ 対話的な学習を取り入れることでつく力も多くなるが、学習の土台として「一人で学習する力」が必要になると感じた。 (白田 弥生)

I 研究主題

主体的、対話的で深い学びの実現を目指して(3年次)

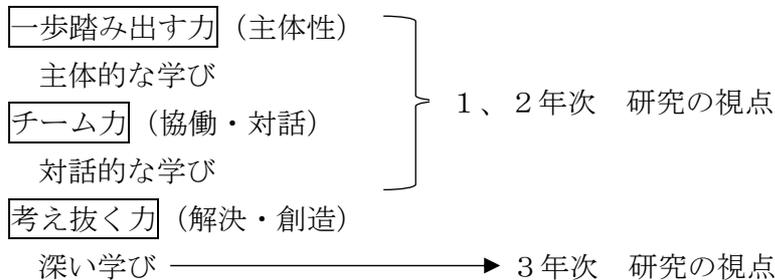
II 研究設定の理由

本校は学校教育目標を受け、一昨年から研究テーマを「主体的、対話的で深い学びの実現を目指して」と設定し、授業改善に取り組んでいる。

3年次である今年度は、研究の視点を「深い学びの実現を目指して」の1点に絞り、教師一人一人が自分の課題とすることや取り組んでみたいことに挑戦する個人研究に転換したことである。自分自身のキャリアステージに合った課題を設定し、文献や研修を通して学び、学んだことを実践し、ふり返りまた新たな課題を発見する。まさに、子ども達に求める「探究のサイクル」(課題設定→情報収集→整理・分析→まとめ・表現)を、私たち教師も同じようにやっていくというものである。

III 研究の実際

(1) 研究の視点【横断的に育成を目指す「資質・能力」3つの力】＝社会人基礎力



(2) 授業の実際

① 4年 国語科「ごんぎつね」算数科「小数のしくみ」

個人研究テーマ:特別支援教育の視点から見る「誰一人取り残さない教育」の実現に向けた教科指導の在り方

(教師の手立て)

誰一人取り残さないためには、一人一人に合った(やりやすい)方法を、子ども達自身が見つけられるように育てることが大切である。「学習ツール」(ノート、タブレット等)、「形態」(個人、ペア等)、「順番」(個人→協働、協働→個人等)の3点を工夫し、子ども達が自分に合った方法を見つけれられるようにする。



(実践の考察)

○書くことが苦手な児童もタイピング入力や手書き入力をしたり、板書を撮影したりして記録を残すことができるようになった。

○実体験ができないことも、デジタル資料や動画等で間接的に体験し、興味をもって学習に取り組めるようになった。

▲学習形態が様々になると、教師が見取れない部分が多くなる。

▲「学習」という意識が薄れがち。子ども達自身の判断力や自己管理能力を育て、効果的な学習のために使えるようにしていく必要がある。

② 6年 特別活動「南小祭の劇の演目を決めよう」「卒業式で歌う歌を決めよう」

個人研究テーマ：子ども達が納得解を見つけられる話し合いの場の設定

(教師の手立て)

「対話する」と「決断（議論）する」の2つのフェイズからなる話し合い方を意識させ、最後はみんなが納得できる話し合いになるよう促す。必要に応じて、シンキングツールも活用させる。

(実践の考察)

○2つのフェイズ「対話する」「決断（議論）する」で話し合うということを子ども達と確認しておく、安心して話をするができるようになった。話型指導ではなく、話し合いの方法を教える。



▲「決断（議論）する」際の基準となるのは、目的意識や相手意識だった。子ども達に話し合わせる以上、これらを教師が一方的に押し付けるのではなく、子ども達と一緒にここから決めていきたい。

▲時間に限りはあるので、ある程度子ども達の意見が出尽くしてきたら、タイムリミットを決めることも必要。

IV 成果と課題

○年に数回だけ行われる授業研究会のための実践ではなく、年間を通して子ども達の資質・能力を伸ばしていこうという意識が以前より強くなった。子ども達の様子や変化をつぶさに捉えるになり、捉えた変化を子ども達にフィードバックすることで、子ども達の自己肯定感が高まり、学習を楽しむ姿が多く見られるようになった。

○学校研究とカリキュラム・マネジメントの親和性が以前よりも高まり、必要感を持って作成できた。結果、作成に係る無駄が省かれ作業効率も上がった。

▲個人研究で取り組んでいることが、授業研究会の場で生かされていない事例も見られた。年度途中で指導案の形式を変更したが、更に検討を重ねていきたい。

(荒木 秀樹)

I 研究主題

誰一人取り残さない 子供が育つ授業づくり

II 主題設定の理由

本校は、「誰一人取り残さない 子供が育つ学校づくり」を学校教育目標に掲げている。「誰一人取り残さない」とは、全ての子供の学びを保障することである。子供一人一人の学びを把握した上で必要な支援を判断すること、子供の思考の流れを大切にし、子供と共に授業を作ること、そして、ICT 機器の活用により個別最適な学びを実現すること等、子供が理解できないのは、指導者の関わりに課題があると捉えることである。また、「子供が育つ」とは、「自分で考え、決めて行動できる」ことをねらいとしている。目指す子供像である「主体的に学ぶ子供」、「他者を尊重し対話できる子供」、「自分の身体を知る子供」の育成を目指し研究主題を設定した。複式の学習形態から「探究的な学習」に迫るためには、協働的な学びが重要である。それに必要な自分の思いを明確に相手に伝えることができる力を育てるために、資質・能力系統表を作成し活用していく。

III 研究の実際

1 研究の視点(学校全体で育成を目指す資質・能力とのかかわり)

(1) 自ら行動する力【主体的な学び】

- ・自ら学ぶ力の育成（子供が学習の見通しを持ち、自分たちの学びを作るために、学び方の支援、問いかけや「単元づくり」「授業づくり」を子供の実態や教材の特性に合わせて計画する。）
- ・個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図っていく。（目標達成までの道筋や追求課題の相違をとらえた授業展開、教材研究やカリキュラム・マネジメントの充実）
- ・ICT 機器の日常的活用をする。（学びの個人差や、考えの共有への対応）

(2) 人を大切にする力【対話的な学び】

- ・違いを優劣なく認め、互いを尊重し合う学習を仕組む。（考えの広がりや深まりのある主体的な話し合いを通して、みんなで学ぶことのよさが実感できるようにする。）
- ・自己対話を通して、合意形成の積み重ね（当事者意識を持たせることを大事にし、子供同士を言葉でつなぐ。）

(3) 考え抜く力【深い学び】

- ・自己決定する場の積み重ねのある学習を展開する。（子供の学習の振り返りを次時につなげるとともに、指導と評価の一体化を大事にする。）
- ・学習で身に付けた知識をつなぎ合わせるとともに活用する。（他教科で得た知識を、教科横断的な学びの中で結び付けていく。）
- ・課題に対して粘り強く解決し、挑戦する意欲を持たせる。（課題解決の手段や、伝え方は子供が自分で決定できるように支援する。）

2 授業の実践（学年・教科・単元 子供の姿の変容と教師の見取り・支援）

(1) 1年 算数科「おおきいかず」 2年算数科「かけ算（2）九九をつくろう」

友達と自分の考えを比べたり、最後まで共感的に聞いたりすることができていた。授業者が子供一人一人を大切にし、否定しない優しい声がけ、子供の発言をつなぐ問い返しが効果的だったからと考えられる。1年生は、「10のまとまりをつくる」活動で、2跳びで数えている友達の良さに気付いて取り入れていた。2年生は、自由進度による学習場面で、それぞれの目当てに向かって学習できていた。安心して学習できる共感的な雰囲気と子供に合った教材の工夫により、友達との関わりが生まれていた。



(2) 3年 算数科「わり算をかんがえよう」 4年 算数科「小数のしくみを調べよう」

子供たちが「今日は何を学ぶか」を理解し、授業者がねらっている資質・能力（「人を大切にする力」「自ら行動する力」）が身に付く授業だった。授業者の子供への声がけ（例：「すごい」「ほう」などの認める言葉）、「答えだけでいい？」「何があると分かる？」「時間はどれぐらいあるといい？」



など子供たちに選択・決定させる言葉）、渡りのタイミング、課題を把握するまでの時間をいかに短く伝えて活動するかを効果的に支援していたからだと考えられる。3年生は、友達の考えを聞いて自分たちで学習を進める姿が見られた。4年生のある子供は、何もしたくないように見えていたが、その後の行動から実は考えていたことが分かった。授業者が誰一人取り残さないように子供の実態を見取って、適切な声がけや支援をしていた。

(3) 5年 国語科「よりよい学校生活のために」 6年 国語科「みんなで楽しく過ごすために」

共感的な人間関係、友達を受容する言葉、学習に向かう態度など、リラックスした雰囲気の中で、話し合いの形式を保ちながら学びを進めていた。子供同士の温かい関係性、考えを否定されない安心感が土台にあるため、授業者は両間接で学習を進めることができていた。子供たちの学びの見取りとそれに対応した支援の積み重ねが大切である。5年生は、授業者が近くにいると頼ってしまう姿があった。子供同士の話には、価値付けたい対話がたくさんあった。6年生は、内容を決定する場面で、形式にとらわれない対話的な話し合いになっていた。思考ツールを活用したことで、その必要性や良さをグループ分けしながら話し合ったり、学習の振り返りに対する思考を深めたりすることができていた。



IV 成果と課題

- 育てたい資質・能力を視点に、子供の実態に合わせた授業をつくったり、子供の変容を見取ったりしたことで、一人一人のつぶやきや困り感に対応した支援についての理解が深まった。
- ▲3つの資質・能力が育つ授業づくりに取り組んできたが、さらに、「学び方を振り返るための手立て（自己調整力の育成）」「見取りを生かした授業づくり」などが課題である。また、資質・能力の育成と同時に、「教科としての見方・考え方を働かせたか」という視点を持った授業づくりをどのように進めていくか、さらに考えていく必要がある。

（牧野 由香）

I 研究主題

「生き生きと学び続ける北谷地っ子」の育成
～ みんなが考え、みんなで深める ～

II 主題設定の理由

本校は、昨年度に引き続き、研究テーマを「生き生きと学び続ける北谷地っ子」と設定した。「生き生きと学び続ける子」とは、課題をつかみ、課題解決に向けて進んで自分の考えを見出し、自分の考えを出し合う中で共感したり問い返したりしながら友達と生き生きと学ぶ姿と捉えた。

このような姿を目指すためには、児童が課題を深く追究し、友達と対話しながら学びを深めたり、学習の振り返りが次の学習に役立つことに気づいたりすることが大切であると考えた。また、そうしたことが、子ども自身が学ぶ喜びを実感し、主体的で協同的な学習となり、深い学びにつながるのではないかと考えた。

そのために、指導者は学びをつないだり互いに深め合うための手立てを考えたりすることが重要であると考え、「みんなが考えるための手立て」と「みんなで深めるための手立て」を研究の視点として日々の授業に取り組んでいる。

III 研究の実際

1 研究の方法

- ・ 次の2つの視点を設けて研究を進めた。

視点1 みんなが考えるための手立て

視点2 みんなで深めるための手立て

- ・ 各自が選んだ重点研究教科の授業を公開した。
- ・ 学期末に「授業チェックシート」を活用し、指導者が自己の授業を振り返り、成果と課題を見つけ、授業改善に生かした。



2 授業の実際

学年	教科と単元	主な成果 (○) と課題 (△)
一年	算数科 「おおきいかず」	○授業の合間に、子どもの姿勢や態度をほめるなどの言葉がけをしたことで、児童が最後まで意欲的に取り組むことができた。 ○交流の仕方を確認したり、視点を与えたりすることで目的が明確化され、深まりのある交流ができた。 △ペア交流の時間を十分に取れ、考えを深められるように、授業の構成を考えていきたい。

二年	<p>生活科 「春の町 はっけん」</p> <p>○1年生に伝えたいという相手意識が持て、さらによくしたいという思いが意欲につながった。</p> <p>○児童がクイズの出し方や発表の仕方を考えることができたので、主体的な発表につながった。</p> <p>△振り返りの時間を確保し、友達や先生からのアドバイスをもらうことで、より自分の考えを深められるようにしたい。</p>
三年	<p>算数科 あまりのあるわり算「わり算を考えよう」</p> <p>○自分の考えを発表する際、書画カメラで全体に見せながら話すことによって、わかりやすく伝えることができた。</p> <p>○学習シートや図、おはじきを使ったことで、自分の考えを持つことができた。</p> <p>△目的を伝えてから話し合いを設定し、友達の考えと比較しながら聞けるようにしたい。</p>
四年	<p>算数科 垂直・平行と四角形「四角形の特ちょうを調べよう」</p> <p>○ICT 機器を活用し友達の作図した四角形を全体で見たことで、児童の意欲や思考の助けにつながった。</p> <p>○目的に合わせてタブレットやワークシートを使い分けたことで、学びが深まった。</p> <p>△話し合う目的を伝えた上で活動に入ることで、友達の考えに共感はできたが、さらに考えを深められるように「なんで？」と聞き返せるようにしたい。</p>
五年	<p>国語科 伝記を読み、自分の生き方について考えよう「やなせたかしーアンパンマンの勇気」</p> <p>○単元のゴールを明確にしたことで、「全員で達成しよう」と意欲的に考えを持つことができた。</p> <p>○事前に偉人の言葉を選んでいたので、一人一人が考えを持ち話し合いをすることができた。</p> <p>△話し合いの視点を明確にし、対話の中で考えを深められるようにしたい。</p>
六年	<p>算数科 データの調べ方「データの特ちょうを調べて判断しよう」</p> <p>○事前にデータ分析を済ませていたので、自分の考えを持つ時間が確保され、じっくりと話し合いをすることができた。</p> <p>○意見の相違点や納得できない点などを出しながら話し合いを行っていた。</p> <p>△算数のよさ、平均値のよさを感じられるような資料を活用していきたい。</p>
きらきら (三年)	<p>算数科 かけ算のひっ算(1)「大きい数のかけ算のしかたを考えよう」</p> <p>○図工の作品から課題へつなげ、自分事として課題を捉えて取り組むことができた。</p> <p>○ICTを活用し、正方形の辺を色分けしわかりやすい問題提示になっていた。</p> <p>△さらに考えを深めるために、自分の言葉で説明できる力を育てていきたい。</p>

IV 成果と課題

- 問題提示の場面で ICT 機器を積極的に活用したことで、課題が焦点化され、自分の考えを持ったり思考の手助けとなったりと、自分の考えが持てた。そのために、他者との相違を感じて学習の理解や新しい気付きにつながる活動ができた。
- ワークシートや掲示物を工夫することにより、解決方法を一人で考えるのか友達と相談しながら考えるのかを選択させる場面を設定できた。そのため、課題に向けて一生懸命考えたり、あきらめずに考えたりしながら最後まで取り組む姿が見られた。
- ▲「教師の出」の場面を工夫し、子ども同士の対話で学びが深められるようにしていきたい。
- ▲友達の考えに共感するだけでなく、疑問を問い返して深く学べるようにしたい。

(布川 美智子)

あ と が き

先日、2年生の生活科の授業研究会がありました。単元名は、『つくる 楽しさ はっけん』です。24名の学級の子供たちは、身の回りにある輪ゴムや割りばし、トイレットペーパーの芯などを使って「動くおもちゃ」や「音の出るおもちゃ」などを一生懸命に作っていました。動かしては、もっと速く走るために風の送り方を工夫する子、もっと遠くまで飛ばすために輪ゴムの付け方を変えてみる子など、指導案の目標にある通り試行錯誤を繰り返す姿が見られました。

この授業で、私が「いいな」と思ったことは、子供たちが活動する時間が十分に保障されていたことと、自分の思いが発展するための環境（場所・仲間・指導者）が普段通りの安心感に包まれていたことです。子供たちは、自分のおもちゃという対象に目一杯関わる中で「もっと〇〇したい」という意欲が生まれ、一人で、あるいは仲間と更に深く対象（おもちゃ）と関わっていきました。事後研で、指導者にその時の子供たちとの関わりについて尋ねたところ、『「こんな工夫をしてほしい」という思いよりも『どうしたらもっと楽しめるかをいっしょに考えたい』という思いでした。』という答えが返ってきました。

1月に河北中学校を会場に小中実践交流会が開催されました。理科、英語、道徳の授業を提供していただきました。3つの授業とも、生徒が、じっくりと考える時間が保障されていました。そして、生徒自らが、新しい考えに気づくような環境（グループ・学ぶ学級・指導者）の充実が見られました。「良い授業とは？」と話題になることがありますが、私は、「生徒たちのつぶやきや発言が印象に残り、良い意味で指導者の姿が印象に残らない学習者が主体の授業」が良い授業ではないか、と思います。その意味からも、とても「良い授業」を提供していただきました。

令和5年度の町教育研究所のテーマは、『小小・小中連携』です。本年度は、町内の小中学校に勤務するすべての先生方が、自校以外の授業研究会に積極的に参加することで、日常の授業改善を目指すとともに、河北町として育成すべき児童生徒についての考えを深めてきました。事後研では、「河北中の先生」や「〇〇小の先生」という呼び方でなく、「鈴木先生」や「高橋先生」というような親しみを込めた呼び方が見られるようになってきました。昨年以上に、町内の小学校同士、小学校と中学校の距離が近くなってきた感じがしました。児童生徒の学びについても義務教育9年間の系統性が見えた気がします。

この紀要には、縁あって河北町に勤務なされた小学校、中学校の先生方の今年一年の取り組み、プロセスが記されてあります。更なる小中連携の視点からも熟読いただき、明日からの授業改善に生かしていただければ幸いです。

結びになりますが、本研究所のためにご支援・ご指導を賜りました河北町、河北町教育委員会をはじめ、本研究所の事業の準備・運営にあたっていただきました全職員の皆さまに深く感謝申し上げます。

(副所長 丹野 宏紀)